特別
イ 4
3163
1(9)

金葉和歌集巻第一

春

堀河院御時百首の哥めしけるによめる
立春の心をよめる　修理大夫顕季

うちなひき春はきにけり山川の
岩まのこほりけふやとくらん

春宮大夫公実

春立て梢にきえぬ白雪は
まだきにさける花かとぞみる

右京大夫仲実

いつしかと明ゆく空のかすめるは
あまのとよりや春はたつらん

皇后宮肥後

いつしかとみしはれたる川のとけ
水上にわかやは春はたつらん

百首哥の中に初春の心を
よみける

前斎宮河内

春のくる夜のまの風のいかなれは
けさふくにしもこほりとくらん

[seal stamp]

早春乃心をよめる
左京大夫長實
いはかふゝき雪乃むらきえたるを
あしたのひかり霞わたるか
正月朔日雪ふりけるにのほり
よめる
修理大夫顕季
けふ乃ひ乃ひかりもしろきゆきのはれ
いつことかしるくわかれけむ
同年
春宮大夫公實
あらたまの年のはしめの春霞たちくる

さゆるとゆやいそくみゆるをせく
寛治乃頃家の今宵あきたちて
少将公教母
あさみとりかすみわたれるなかやまや
ときは乃山もはるはきにけり
藤原顕輔朝臣
ゆくしとそりふくれとも乃いまきぬ
古田乃やまはなそてきにけり
歳乃心をよめる
左京大夫長實
あつさくはよしの乃山のさくらはな

いふこのやまかけにはなかりけれ
百首歌中に鶯乃心をよめる
修理大夫顕季
うくひすのなくにつけてやまかねふく
きひのやまゝ人はるをしるらん
ところゝに鶯をきくといふことを
よめる
春宮大夫公実
なふよりや梅乃立枝にうくひすの
声ところゝにきこゆなるらん
正月ついたち春立之日よみける鶯乃歌

ふるをよめる
藤原顕綱朝臣
年のうちやとしは雪ふりて鶯乃
都にいつしかいろにいてなん
暁鶯をよめる
鶯をきゝてをとといふことをよめる
源雅兼朝臣
鶯乃あけてふみとをまちし
いつしかとそおもふあけのゝ
皇后宮にて人々歌よみけるに
[illegible]
めつらし
源俊頼朝臣

春雨のふりしくれともくちもせぬ
霞はさらに秋のもみちなりけり
良暹法師のもとにまかりて
大原に住侍りけるに梅のさかりに咲
なるさきに八月はなむめもなきを
しられ梅かつのにほひ人のかな
良暹法師
梅乃花わかれしともにさきぬれは
いかにくらしつらむとはいはれぬ
梅香盛遠といふ事を
まてといふ春てへのわか命

前大宰大弐長房
むかしのともとせ見やいかにすみけん人の
おもひそめにし袖にうつりはなのにほひな
朱雀院にしはしまかりて梅の庭に
ちりさとしよ月をまちまちかな
大納言経信
くらふてふこのころはせしかひなき
ひさかたのあまの乃はなのちりける
遊雜の家に梅花を
前大宰大弐長房朝臣

ちるまての影ハ水にうつりけり梅か香
そのりハ香をへたてゝとわたりまし

梅花遠薫　源光行

かきりなきあるしやいつも梅か枝
香をハ梅あり枝さそふらむ

子日松を遠ねて　藤原家長

まつ日野の枝も日の松ハ色かへて
神さひまし梅の影そうつりける

百首哥の中に　大蔵卿匡房

春霞たなひくそらも花かこのまに
ほのかにきこゆ若菜つむらむ

柳絮随風　まさ香

風吹けは柳の糸の乱れつゝ
ふりくるゝ色もみたるゝ

陰陽頭

百首哥の中に

春風の吹くにまかせて柳の糸
ちらぬ花のみたれあふかな

皇后宮大夫

花さそふ風の吹く
うちわたす柳のいと

池辺乃柳といふ事をよめる

源雅兼朝臣

風吹は波乃あやおる池水に
いとひきそふる岸乃青柳

[illegible]

[illegible]

[illegible]

霞中帰雁といふ事をよめる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

吉野山[illegible]

[illegible]

[illegible]

新院御製

たのもしく我をやまちし行ゑの

ゆかしさにのみわかれはしらぬ

左大臣

志ら川の花さかりにや君なれし

たちかへり乃ふ花もともしのわかれ

左京大夫長實

今日もまたいそのわたりをしるへに

吹風もさそひし花をちるをしものなかき

つかふをいつれかなしき年もやなかる

紀貫河内前衛

よしの山花乃ためしとやなかの桜はなそ

をはしとともましく川の水

源雅兼朝臣

覚えてしもなきみの宮の桜の匂

みなをしかくとも流れ乃まきろもゆかき

宮滝かみなの下にる乃水の淀

よしのまなる経へ

俊頼朝臣

春の宮の久立かへるさしきなりき花

咲みれはけしきなるおもへる

吉野山桜といふかなとよみる

春宮大夫公實

しら雲とまかひしはなのちるころは
あらしの山とそいふへかりける
松間桜といへる事をよみける
内大臣
春ことに松のみとりにうつもれて
うつりきてしきあとふかくさくらけり
左衛門督実能
こ高き花は松よりうつろふかたもさくらなりけり
枝もしつかに松のしつえにかかりけり
山寒花遅といへる事をよみける
左京大夫顕輔
やまさとは梢の風のをとはせて
なれはさくらそおそくさきける
花為春友といへる事をよみける
内大臣
ちらぬまは花を友にてとまりなん
はるよりのちのしるへなくとも
新院の御前にて花契遐年と
いふ事をよませ給ける　待賢門院中納言
白雲とたえす匂へる桜花

ちらさせはまたとてやきこえまし

藤原顕輔朝臣

よしのやまいりみつかきもものゝはす
かふ乃すそはけむとしつゝをしまき
絲の我をとしてまつ

源貞亮朝臣

しら雲とまかふ櫻をたつねきて
つみぬやまなみわたりつるな
落にほの時ならぬ花のいろ
乃そまなかりしはゝるさくらめ

清かりそにはつれ人のあか
りつりをくを海松もなみまく

後河院

名にしおはゝ山をそなみ
嵐乃とくやとふかれをまつ しらす

源師賢朝臣

くふなきさめにあかぬ櫻
こゝろからふきかへしつる風
散山花とはなを
太宰大弐長実

おくみやまつゝしもとかへてみすわ
おもひのまゝにわかれぬるかな
春なれは山の花をみにまかりて
摂政左大臣
ふるさとのはなのさかりはすきぬれと
またゆきのこるやまさくらかな
人々桜の歌十首よませ侍りけるに
よめる
修理大夫顕季
ちるさくらとゝめぬかせのみよしのゝやま
たちもかへらてなかめくらさむ

山花盛久といふことをよめる
太宰権帥匡房
おしなへて事もなくやくもまし
まちとのおもひにひとはさくらの花
宇治前太政大臣家歌合に桜を
よめる
皇后宮摂津
ちるまてはのこるものかはさくら花
風ふけはまつもゆきとそみえける
源俊頼朝臣
山桜咲そめしより久かたの雲ゐにみゆる滝

雲井よりみねのたきの瀧乃しらいと

遠見山花といふ心をよめる　大納言匡房

かつらき山に雲のかゝりしは花乃さかりにめて侍

あまのはらかすみとともにたちかへりみゆる

藤原忠隆

よし野山峯のこすゑにみえつるは花のしら雲

みゆるはたれのことをかはしらむ

待賢門院清時女清房乃女房達

あまのはらそらにはなみえあまのはらまちわひよ

みなれぬ

右近衛大将の母

まことにあかぬ春のよはほのかにそらのかすみ

はつかにみゆる風吹けはちりまかふらむ

今よりはわすれぬ　俊恵なる

よしさらはちりなむことをおもはしなきを

おもひそめてはちりぬとも

後冷泉院清時皇后宮の侍従

さくらのいろ

堀河右大臣

春ごとにあかぬ色なるさくらはなおもふなかにも

雲乃かゝれるかたにしあれは

月おもひ花といへることをよめる

大蔵卿匡房

月影てりもみちぬよひの雲は
風のつきとてもしらてちるかな

水に一葉花といへることをよめる

源雅兼朝臣

たゝちるとみし花もやまさと流るらん
さくらちるまてとふ人のたのしかる
影見えて月のひかりも桜の花の十五夜
よはせはなかるゝみちのかな

太宰大弐長実

春の日ののとけきそらにちる花は
風にみなかへるものとしらなん

落花満庭といふ事をよめる

右兵衛督実能

とふ人もなき宿なれは庭の面に
庭にちりくる花のちりしく

落花の随流水の風吹そ九輪
そらにちりしといふ事をよめる

源俊頼朝臣

木のもとは吹ともゆかしなき桜花
かけにあまる風をさそひつゝわひぬる
落花をよめる　長實母
春ことにおもふこゝろは花の散
杉すれもしらすこのわたりぬ
落花随風といへる事をよめる
大蔵卿行宗
うしやまのいかなり吹けはのこる花
ちるをとゝめて海のせとまわりなん
水上落花といへる事をよめる
大納言經信
みなかみに花やちるらんやまかはの
ゐくひにいとゝかゝるしらなみ
落花満道[illegible]
水[illegible]しちるもみちのむらさきにつゝみてしるしのうすくれ
しめそこのかへしはしわかれ[illegible]
落花尤よろしといへる事をよめる
藤原永實
ちりつもるをしむ心は花の雪にまよふ
散りまさることもなきなみの[illegible]

堀川院に侍ひし乃ちわらふことかきけ
あつめくさはきたまへる物のふるきこれ
るよ俊せ給ひて中宮乃清すまく
てまつるを給はりて文箱に入て奉る
くきつきと侍らせ名残いよゝある

清通殿

桜華雲のよそにみえしあさ清のあらむ
世乃中にいとひしものをゆかれなき

花乃庭よにちりつもる流れもあるふきて見
あらしあれ

郁芳門院安藝

庭の花もとこそえたに咲かめなる
ちるらんもはやいかはうへき

東思葉もとゝして事をよめる

源縁法師

くもゐにてうつるはちかうつる花桜
よそにいこふてまちかねしそ

見えへ海のうへけりまし山田をはくれ
みえしかな

二条関白殿下

とふ咲山田をはくれてふきさつ乃男は
かへりくや花をゆかれしふす

後冷泉院御時月あかゝりける夜
女房達をあまた供して南殿にいて
給ひけるに庭の花ちりまかひて
月のひかりにうつろひていとおもしろく
さふらふ人々に是やと仰事あ
りけれは中宮の御方に下野やさふらふと
尋させ給ひけれはとりあへす
よみていて参らせけれは花折てまゐ
と仰事ありけるにはあまりにみるを
なかめいりたるに仰事ありけれは

まかりけれ

下野

長き夜も春はなかめしにけりなきさくら
雲井乃花をいつとかはしらむ

新院乃少納言そ袖の花菫に
つみたる

中納言雅定

ちるまはそ花の色あるをきとまれ
いつれの風そくるにあり

なかりそへ人に心をそへてその年

権僧正永縁

厳の中をわたる

山里は松の通りてこのなれもいつれ

おもふまにしらぬ人にもとはれ

百済乃中杉菴君
ちとよみまれ

勝坂文郡孝子

おけにさはれるとやめまつ虎
杉菴君

まちをこめそもとむくよるおれも

山里とおつ

大納言経信

あら小田にけりそたよ川をまさ

ほくしゆ偏フりもろつりし

蘭をとあつ

津守国基

暁乃あさまれにもつ人乃をたちまし

たのまれてかれさもめ人ともめとほさ

長谷泉庵清晴和歌所乃女房の家

よ蘭をとあら

芳見陀資

山里は冬そともかう乃なかり侍り

いゝかれ水をゝぬめいたつきに

紫乃類をき人あつまりてあれなれ

流れそてれりまをなれ

中納言雅定

人のとまりにせん人をかりつれ

おもふにほへうそやまかせ乃もし

手向乃歌を　梅園左大臣
かきわけつめちらふりまよ歌を
いくふあるともいつそ乃川なみ
同心を　太宰大貳長實
数冬て　ゆきくる風もにほひます
いつるのにとりもちもとなん
咲見鄭鵝鴫と　いふ程にあり
梅園左大臣家参河
入りそし欠　梅子　紅乃ゆえくこゝろ
山ざとてここし岩ほにとしかね

浪乃水面ともに　梅か枝かなとしくちきを　大貳典侍
たちかへぬもみつりりかに宿の可きちふも
とよわい乃りつりのかちを
藤也を深く　顕輔卿下
むらそらおの乙乃梅のわは花のうち
あかきしまたれ　梅もとちゆりまう
庵乃梅をしたいれはたにつゆる　律師澄覚
かき数くもぬるまよ宿乃花林かに味

たまさかもかくてもなき花のかゝみかな

愛宕の松といふ事をよめる
寂蓮法師

春風のふきはらひせは花の色を
なかなかにさゝふ花とさくらまし

二条関白家にて池辺の松
といふことを
大納言経信

いかばかり池水の松の梢もうつろふらん
あまくらのくもふかく山の色はかわ

百首哥の中に藤の花を詠て

修理大夫顕季
ときはなる松にかゝれる藤の花
風ふかれてうつりやちりかゝらん

白河院鳥羽殿にてといふ事をよませ給ひける

神祇伯顕仲
めつらしくわかれしのちをまつとしも
うちなひくかけのこすゑにも

藤原家隆
藤花といへることを詠て

内大臣家越後
あしひきのやまふかくみなにかけてさく藤の花

まてはいく秋をとなりてことわりわ
影しらぬ　盛宗
花ちりしや春めくまちかきこえ
まち暮らしてありちる里ありつらん
三月盡の心を　大僧正證觀
春のかりみちくるまてはいつのまには
かへるらん大空よりも霞やとまるへき
中納言雅定
あかなくに春めくすゑをおしむとも
こゝろをそへて人もかくはなるるか

寄三月盡恋のこゝろを
同
春はいまかへるいとなみもたまはは
おもひいつるはかなくものこりつのな
京極院今日は行春の三月盡のうの人
のちにたかをつけてはかなきいつつ
くれ　顕輔卿
思ひやるこゝろはかけてきこゆるかな
立かへり春もたえぬるかたもかな
桜ちるたかねの雪やけふは三月盡

乃んとさよまを はなれはよとよめる
源縁法師
ひとふまち卯月乃いまそまたるゝかな
[illegible]
ほとゝきすもまたん

後拾遺和歌集巻第三

夏

卯月乃朔乃日家乃人のもとにつかはしける
源師賢朝臣
桜色にそめしころもをぬきかへて
山ほとゝきすけふよりそまつ

二條関白白川にて人々餘花乃心を
よみ侍りける　藤原国房
夏山のあをはましりのおそ桜
はつはなよりもめつらしきかな

應徳元年四月三条乃内裏にて
庭樹結葉といふ事をよませ
給ひける　　院御製
さくらちりて梢まはらになりぬれは
松乃みとりもわきてみえけれ
大納言経信
玉かしハ庭もはひろになりにけり
こやゆふしてゝ神まつるころ
高陽院にて人ゝ哥合し侍けるに
卯月乃はしめをよめる
春宮大夫公實
雪乃色をうはひてさける卯乃花に
小野乃里人冬こもりすな
卯乃花をよめる
ことゝもによめる　大蔵卿匡房
ほとゝきすまつのゆふくれにしまき山里に
くまつきもみつりとけふのかな
卯花をよめる　源俊頼
雪かとしもまかふもそはなの花
かくてきハ月み乃秋とも見え
摂政左大臣

卯乃華乃さかぬかきねハなけれとも
名にながれたる玉川乃さと
法性寺入道前関白太政大臣
[illegible]
中納言[illegible]
神山乃ふもとにさける卯乃花ハ
[illegible]なるらん
宿乃毛と流る
大納言経信
賤乃め乃[illegible]
[illegible]やつまとてかわ
[illegible]

修理大夫顕季
[illegible]
[illegible]
[illegible]
藤原節信
[illegible]郭公
[illegible]
郭公乃[illegible]
[illegible]
後徳[illegible]大臣
ほとゝきす[illegible]

おもひいりつるぬるも乃かすみあまりぬれ

源雅光

郭公嶋にもとむる人にかはれて恭

こゝろさしおもへとも人にこそしらねとも心のわかれる

ほとゝきすなくねならはしいかにいますそ

二日まつわするまそ咲とゆきのそ淡

題

子規ちとりの乃やま波に好とまる

藤原顕元

ほとゝきすたつさとゝ来ぬまくらか

長寿へて家の今もこゝろ待つ

左京大夫経忠

とことはにとはまほしきを聞くと

名乃みしてなかなかものをおもはする

時鳥まつほとをいとふ一声を

内大臣

遠方にゐてなきつるや郭公

待ちわひぬよるの床にもまつよ

郭公ありあけ

藤原家輔

ほとゝきすなくねもまたきあくるかな

よのなかにうちつけに山ほとゝきすの里

承暦二年内裏歌合に郭公を

藤原孝善

人よりもまつこそきかめ郭公
たちはなのそらとめなきわか
ほのかにもなくなるこゑのあはれなる

郭公をよめる

権僧正永縁

きくたひにめつらしけれは郭公
いつもはつねの心ちこそすれ

人々大井にまかりて郭公をまつといへる心をよめる

源俊頼朝臣

待つの里はそこともしらぬ郭公
いつきても山のはのほのかにきく

實能卿家にて郭公をよませ侍りける

中納言雅定

郭公はつ声きけはかけなくに
まことにいまもとやきかまし

郭公を待といふ心を

源清輔

蜀魂まちつるよはのあけかたに
なきてすきぬる人の心は

俊忠卿家の歌合に郭公をよめる

みちとをき

二條関白家筑前

行人もやとをハしてほとゝきす

なのりてこそとゝめてとゝまる

けるをとゝめてもとまらさりける

よめる

中納言女王

ふるさとはゝるけきのへにつゝむとも

すみかとはいつしかあるらむはるのなつ

郭公を聞て

大納言経家

やまさとのいつこのゆかりまち

まちよ各のなけくにほとゝきす

中納言雅定

ゆふさりのよはやまとのこ乃

ふるみやのゝかせのわたるら

宇治前太政大臣家の歌合によめる

よめる

康資王母

山さくらさきそめしより久かたの

くもゐにみゆるたきのしらいと

皇后宮の卯花をよめる

まつかせのゆくへとをきあきの

よみ人しらす

中原高真

ゆふされはこきくつらく郭公
なくなくすむいくたひかきくまし
時鳥を待る 大宮道経卿
ほとゝきす一声をまちわひて
あやなくあまのかはゝしめりぬ
まちかねてほとゝきすをきゝてよめる
あかほとゝきすまつといふ事を
皇后宮式部
郭公雲のうへまても月影
のほるかたはなきのみそ
暁聞郭公といふ心をよめる

源定信
わかやとにまつほとゝきす山のはに
明ぬれはかゝるかたにゆく
郭公をよふかきにきゝてよめる
よみ人しらす
蜀魂たつねたにもあかぬものを
まれにいそくらむこゑそきこゆる
雨中郭公といふ心をよめる
大納言経信
かくまてにこゑをはなかてほとゝきす

なやこゝろてりきよ五月乃あやく

五月五日實能かもとへくすたまつ
かはすとて

内大臣

あやめくさねたくも君かとはぬかな
けふはこゝろにかゝれとおもふに

永承六年殿上の根合に菖蒲を
よめる

大納言經信

よろつよにかはらぬものは五月雨の
しつくにかをるあやめなりけり

郁芳門院乃根合にあやめをよめる

藤原孝善

あやめくさひくてもたゆくなかきねの
いかてあさかのぬまにおひけん

長暦二年内裏の歌合にあやめを
よめる

春宮大夫公實

ねやのうへにねさしとゝめよあやめくさ
たつねてひくもおなしよとのを

文かよはしけるをとこのもとへ五
月五日よみてつかはしける

權僧正永縁母

あやめくさねはわかきまゝのみきはにて
ふかくなるぬまにおひても生たる世と

百首の哥の中にあやめをよめる

あやめ草ひくてもたゆくなかきねの
いかてあさかのぬまにおひけむ　春宮大夫公実

わかすのこゝろ
いくやまたすゝみなん

五月五日宮の哥合に菖蒲といふこゝろを
よめる　左近府生秦兼方

おほつかないつとくのくるめあやめ草
ふかきぬまにもけふはひきつれ

むらさめのはれゆくくもにかたよりて
このまのあやめを人のかはのみ
ゆかしてもみたるゝを陽勝てよのま
讀人しらす

あさましやこやのあやめ草
なにしおふぬまのいはねとやみる　三宮

百首哥の中に五月雨をよめる　参議師頼

さみたれにぬまのいはかきみつこえて
まこもかるへきかたもしられす

藤原定通

五月雨はそゝくいほりのたえまなく
あやめの下葉乃くちやしぬらん

承暦二年内裏哥合に五月雨　源道時朝臣

さみたれはみえしをさゝのはらもなし
あさかのぬまのこゝろちそする

堀河院御時百首哥に五月雨　藤原顕仲朝臣

五月雨は水まさるらし
ゆふのつきはしうきぬめるかな

さゝなみやなかれ(?)　右兵衛督実能

さみたれはまさるみきはの小田のかはつもこゑそきこゆる
水まさりて浦(?)のなみをこえゆくらん

三宮

五月雨は山のかけ(?)のいつみまて
あはれいつ乃みちさへそなき

摂政左大臣家哥合に夏月のこゝろを　神祇伯顕仲

夏乃夜は庭にみちぬる(?)白雪八
よるのまに

月影はさえてさむけき秋の桂
権中納言俊忠家歌合に鹿を
よみ侍る
藤原顕綱朝臣
よもすからつまこふくらふ山のおろしは
ことはりとおもへとすまのうきねを
按察大夫家にて水鶏をよめる
源雅光
夜もすからはかなくたゝく水鶏かな
させるともなき柴のいほを
實行卿家の歌合に夏の風のこゝろを
よめる
修理大夫顕季
夏ころもすその乃草葉ふく風に
おもひもかけすしかやなくらん
水風晩涼といへる事をよめる
源俊頼朝臣
風吹ははすのうきはに玉こえて
すゝしくなりぬひくらしの聲
とこなつの心を
源仲正
さいりかくしの乳のつゆを
かすとかりとやしらいふらん

神祇伯顕仲

志らくもとみゆるやまのすゑよりもして
いくよかはなをみてもあはれなき

家乃哥会に花極乃こゝろを詠る

中納言俊忠

不月やまともわかぬるあさ乃わのさく
風乃ふきてしらくもたつときわかね

百首哥乃中に花をよめる

春宮大夫公実

宮こともみえもすゝろにそれはなもちりなん
やとまつをまちえたり風ははなをとも

二條關白家にて毎夜言草といふ事を
詠る

源俊頼朝臣

こ乃里も夕立しけりあさちふ原
露乃すからぬ草乃葉もなし

宇治の前太政家哥合に鵜川をよめ
る

中納言雅定

大井川いくせ鵜舟乃すきぬらん
ほのかになりぬかゝり火乃影

夏月を詠める

源親房

さゝなみや山乃雲まよりも
かゝるまはなかるゝ月の影
ことし八月十五夜のよ雨ふりけれは
人のもとにてよみける
桜の大臣
月影のみつるをまつにちよのかすを
風乃こゑにきゝ、しらるゝ月のかな
公実卿家にて対泉翫月といふ心を
よめる
藤原基俊
友なくよる乃月をさしてもいはまの
岩もる清水のいくよ経ぬらん
終夜一夜といふ事をよめる
中納言顕隆
みなそこにしつめる月のいつよりか
ひとりよすからこゝにすむらん
なかやまのかけ

金葉和歌集巻第三

秋

百首歌の中に秋立心をよめる

春宮大夫公実

けふこといふに吹夕暮の風の音に

荻のうはゝもそよきしらるゝ

野草帯露といふ事をよめる

太宰大弐長実

きつくゐにかふある乃大野乃原を

吹くかせにしれぬる萩乃下葉の露

後冷泉院御時后宮歌合に七夕の心をよめる

土佐内侍

よろつ代に君そみるへきたなはたのゆきあひの空を雲のうへにて

七夕をよめる

能因法師

織女乃こけ乃ころもをいとはすは

人なみなみにかしもしてまし

七月七日文のおくりそへ侍りける時よめる

橘元任

ぬきつらしいともやとふと七夕の
かさねてけはつくらめくる袖 式部

織女乃心をしらる　大東宮河内
しのふれて夜ふけのやたなはたつめ
通ふらんてりちるまり乃ゆふへとやしらん

三宮
天の川うきてもいよ(?)かなしこのつまはら
あふせこそ乃みなかはかちもとしまへ次

中納言國信
七夕のまつの世はの衣乃手なれしまくら下

あかねさすいはをさしてのまつ
七夕乃後朝心をよめる

内大臣
あかすのみあかしのかみのはしもせ
なかりしの色もはらぬうちをうれ

皇后宮權大夫師時
たなはたのあかぬわかれの涙にや
花のけつかりもたちけるらん

内大臣家越後
天の河八十瀬乃船よ波うけなむ

乃まつりにたむくとも見えぬかな
源俊頼朝臣
時のまもしはしもきえし天川
あけぬまて秋の川かりそめなれは
草花告秋といふ事をよめる
源雅兼朝臣
さらにまた花の錦にしられけり
秋ときつるもしるき事なれや
松虫の声を
源顕仲
咲そめしはなのくさ〳〵めつらしき
いつしかときくにもまたて秋の
たつ秋のきぬるにハ山家早秋
といふことを
大納言経信
をとの川の秋はまつ山里の
葛はらの松の風にさえよ
田家早秋といふことをよめる
右兵衛督伊通
稲葉ふく風の音せぬ宿ならは
何につけてか秋をしらまし
山家秋懐といへる事をよめる

藤原ゆきむね

やまかつのこゝろ人もなきやとゝまれと
うちも萩小田て秋ハきすれハ
ちかはる乃影ハ乃梅津のまて
人そはのわそ田面の稲葉風とふか
きこゆなる

大納言経信

夕されは門田のいなはおとつれて
あしのまろやにはやて秋風そ吹
こ月にかくれて

大江公資朝臣

山乃端をあけて入ぬる夕月夜
いはまほのこのみちの人ととひゝせ
桜波たなひく秋人の夕月の思
心をまよせ侍るゝとよあまれ

藤原忠通

風吹ハ袖やもとつるゝわすれぬるわ
ほたるめく秋乃初月よ
月清宮ゑとこゝろとよみ侍る

清輔朝臣

草枕このたひねをまつ月
月よわかのともちすわりわ

深見月といへる事をよみ侍ける　顕仲卿母

しほともてりまさるらん霜のうへの月（つき）
梢やかましあるよりも見る月

翫明月といへる事をよみ侍ける

前中納言雅房

いにしへもありけむ月も今宵こそ
このゆくすゑぞはるかなるは

右大殿にて翫宮月といふ事
をよめる

春宮大夫公実

くもゐにハありし乃さとに蔵めぬ
おもしろきものやもかなしき月のかな

寛治八年八月十五夜よみ侍ける
まへ池の上にて月をもてあそぶ
といふ事をよませ給ひけるに

隆源法師

池水のそこまで夜の月さえてもしら
この世のまゝにくもゐにもみゆ

大納言経信

てる月の岩まの水にやどるよも

むかし我れ枝をといひてきゝまし
月をみてよめる

民部卿忠教

いつくにもこよひの月をなかむらん
心やおなし(?)ことにてかへらん

後冷泉院御時皇后宮乃歌合
に駒迎のこゝろをよめる

藤原經衡

ひきこゆる(?)関のほかなるもちつきの
なかきよ乃清水に影みえて

駒迎乃心をよめる

源仲正

あはれまつとひきつれて出るもちつきの
こゑそうとへ(?)ほかやあふさかの関

八月十五夜乃心をよめる

源頼房

さやけきはおもはぬ人の月影を
こよひとさへやまたんとすらん

よろつよ九月あかしの月十五
夜をかさねてよめる

姨はなをさらしなとおほゆるとなをしけ
こよひの月は名こそかはりけれ
春宮大夫公實

水上月といふ事をよみ侍る
右京大夫顕季

雲のうへにみなかくらぬとも夜の月影を
清瀧川にうつしてそみる
めかれぬ

九月十三夜翫月といふ事をよめる
源俊頼朝臣

よそみのほるらんや空をしめらん

雲のほらまよはぬ秋のよの月

月を詠る
皇后宮肥後

月をみてこゝろあらぬはなけれともいかにすむらん
松かけもさえてあくるはなのつき
人の雲ゐにはやしのかけをまちてそ
めの本には詠る
源師俊朝臣

いつもてらすみかけにあまてらし
月やさらにしとも
伊勢のゝ花植の山辺人のこゝの
詠かのて詠る
大納言經信

とやかくの里しれ月を見んとも
おもひおこさぬ人乃なきかな
承暦二年内裏の歌合に月をよ
める　春宮大夫公実
墨なすなお高きさやとこめ山乃端よ
いるとも月をおしまさまつし
宇治前太政大臣家の歌合に月をよ
める
皇后宮摂津
照月乃出つるわたりもしらしら雲ま
なかめてもつきぬみそれわ

源俊頼朝臣
やまの端に雲乃衣をぬきすてゝ
ひとりも月のたちのほるかな
山上月といふことをよめる
摂政左大臣
あきはひかりしろしらすはぬき
わきなくやまの月乃こゝろかな
宇治前太政大臣家の歌合に月をよ
める
一宮紀伊
鏡山みねのわしるまね月あるかしま

暑しもふかき影をえんこそまた
漣にすむ波のうへまかりて月ぬるか
かきはつ夜くもらぬ人と秋はつか
深きらん

兼綜師頼

いまくるかけはのかにもなきて
こよはの空て月落すもの人
秋の月ゆくへしらぬとよ
やくらん

藤原澄経

葉のへなき霧たちのほるを更けて
今夜の月をとりとさへましる

晴月をもえあかしつゝ人はまちをよ
めやまれ

源師頼

名におふ夜半のあかしてうらみて
こよひのまつにしらぬめる月のかけ

以月十五夜よ人こさのよるそへりまれ
よるあまれ

平師季

かつらさこ山はつかさへしてもわれ
くもしらぬ月ぬ姑のよるかれ月

入道前太政大臣の三十番哥合

下月のさほをとりかゝる

よみ人しらす

あきのよの月のひかりのきよけれは
よるとくもみえ暗くもあらなくに

月を詠る　　菅原忠道

なつのむきは夜をもしはつくよ雲晴ぬめ
おく山のとのへにもさるめくに月かな

なかその花橋の宴に月をよ
める

権僧正永縁

いつなれは秋はことなるわかれめもなし
おなしこゝろの山しなの月

月を詠る　　菅原輔昭

尺のとやまもとつけの月かけくし
神乃こゝろもすゝしかるらん

めるに

太皇太后宮の歌合に月のこゝろをよ

大納言経信

まつの山嵐に出る月のさえはつる
さほ乃川風に月やさえわたるらん

顕季卿家にて九月十三夜の心

をよめる

大宰大弐長実

くもりなくかゝみとこそは見る月の

こゝろつきぬ人はあらしな
源俊頼
村雲や月のくまをはのこふらん
晴ゆくたひに照まさるかな
月の歌とてよめる
藤原家経朝臣
ときはいこゝろゆるしゝ月影は
いまもさへては人をこひしわ
月残る梢をとてはほとゝきすまよ
まさるらむ
二宮
ゆきとしてん人のつくりのなたふりしせ
月まつわかれをもわかれ
山上月といふ事をよめる
藤原実光朝臣
月影のさし後は海の面そ松てくるたゝ
あかしのうらやとやわたるらん
題しらす
太宰大弐長実
こゝろのたまに海のをちかた
いとゝ思ふかな秋の夜の月
永承四年内裏歌合に月をよめる

藤原家経朝臣

夜とゝもよくも為雲のかよひしに
おもふことなく月をみるらむ

月前旅宿といへる事をよめる
修理大夫顕季

枕ゆふ草のいほりの夜もしのゐる
たつのむろの月をもよそに見る人の

独見月といへる事をよめる
藤原有教

なかむれはおほえぬ事もなかりけり
月やむかしのかたみなるらん

旅路暁月といへる事をよめる
権僧正永縁

ゆはともてりいつといふたつよみなん
月はゐこゝろさへくる山のはをみて

対山待月といへる事をよめる
土御門右大臣

在ゝめの月まつほとにはとをぬらく
山の端をきゝてゆくらんなか

山家暁月といへることをよめる

中納言[illegible]隆

山里乃門田農いねのほのほのと
あくるもしらて月をみるかな

月乃あかりこゝろにかはらてあかりけり
まのわたりて月かけはわかやとの
おもひあかしの人を月にみる
まはほかなまし

平忠国

有明乃月もあかしのせとにあれ
あきはてのわかれそとゝまれ
月おなし萩葉とはいへと事そ見え

源俊頼

嵐ふくやまのもみちの神もこゝろあれ
月さり紅葉乃ちりしそめは
垂ちとよそふる

[illegible]

秋乃まつはの野辺よりの花
あきの枕乃まへのなかなわ
たつるをとふえしをよなかに

顕仲卿母

さくるのこりのいとくのくれ草子
はらとなのまへのおきこゆるわ

題しらす　　よみ人しらす

たまつさにいかけるあきたなと恋の
うはのそらにもまねきたるよのなか
恋のなくさめにもめかるゝ

長宮右京大夫

いなの山ふもとのあらしやさむからん
らいねしありまの夜恋はさゆなし

恋の心をよめる　三宮大進

涙さへうらみしらくのなかにあは
恋のこゝろなりやまさるらん

暁恋といへる事をよみ侍ける

皇后宮右衛門佐

思ふことありあけかたの月の影
あはれをそふるあかつきの鐘

恋ふる事をまつといへる事をよみ侍ける

内大臣家越後

夜まてとたのめし人の心あらはなくのみ
こゝろはしつのをたまきくりかへし

摂政左大臣家にて旅宿恋といへる
心をよみ侍る

源雅光

もろこしハ物こそおもひきたりけるに
さつ花のとまりもとへめくりし袖のか
百首哥乃中に庭乃花をよめる
藤原顕仲
庭中をちるさかりをみるにやとまるつの
とはれし乃山ちまりに峰の花人
野花草露をよめる
しらつゆとしるしはかなき事をよ
しられとも人はいへともあけぬれ
皇后宮肥後
まくはこととりゆふくれの花ちる

太皇太后宮乃扇合に人にかはりて萩
をよめる
僧正行尊
小萩はらにほふさかりはしらつゆも
いろいろにこそみえわたりけれ
萩をよめる
太宰大弐長実
志らつゆもまたこほれぬ乃まゝに萩か花
秋のまつ乃袖に人なとかめそ
女郎花をよめる
隆源法師
をみなへしとまれる野辺のそてにもぬる

萩乃なかるてらし秋やさかりなるらん
影清く霧乃たつ合もなきふりくるを
よるかな　中納言俊忠
夕霞乃色つくしてもみえぬかな　華
野原乃丸てりおもやみちぬらん
紫乃色をしるへ　顕輔
志らつゆやこころをおく乃色さえてまつ
さはく乃人めもよしとさめ
めくりもよの乃風にあはれなく　摂政右大臣
しの乃にしも霜をきまよふをな
摂政左大臣ふく風にとりあへぬ海をよ
めかな　源忠季
さえわたる川乃水もいてまさりけるかな
ふるみ乃よるさえやみへとしもえん
増ちて霞をしるへかな
右兵衛督伊通
あまのはらへもたえやらぬなき
雄の野をそてしの乃さえらん
神祇伯顕仲

せくのうりなれいとつゝらひやそなたん
ほのかにいつるかちらしぬのなよ

郁芳門院前栽合にてよめる
萩を　春宮大夫公実
あるしなき宿にほひくる梅九て
あらいまもねへぬゆるりもとむ

野花薄人をとゝむといふ事を
よめる　平忠盛朝臣
まねく人を酒まつの野辺の花薄
とまれとてりたりせよや

堀川院御時百首乃歌に
さくらさくそらのうすむわかつらゆ
すまふをとるをよみる
源俊頼朝臣
題しらすのきかぬ人ひの浦九て
おもひ川よのはな夕くれ

河霧をよめる　藤原基光
宇治川乃かはせもみえぬ夕霧に
まきのしま人ふねよはふなり

郁芳門院の前栽合にて　兼房とよめる

よめる　　中納言通俊

ときはなるふしまつのきの乃色よりも

またしこゝろそかはらさりける

為房家の歌合に詠める

修理大夫顕季

ちとせまて君のつむへき菊なれは

千年もしあるへきいのちとそ思ふ

堀河左大臣家の歌合によめる

さとゐさつとゝへぬかのもそこなり

藤原仲実

もゝのみやふの立枝乃ゆふしてに

たきのいとのもとにかへるらん

承暦二年内裏後番歌合に詠める

源師賢朝臣

をく山乃梢やいつこおほつかな

こゝらそのなかにいもしほれわ

宇治前太政大臣大井川にて遊覧し侍りけるに

つかうまつりて侍りけるに水邊

紅葉といふ事をよめる

大納言経信

大井川いはなみたかしいかたしよ
きしのもみちにあからめなせそ
太皇太后宮のあふき合に人にかはりて
このみる紅葉にそよみ侍ける
源俊頼朝臣
音羽山もみちちるらしあふさかの
関の小川に錦おりかく
紅葉ふかきをよめる　菅原在良
たつた川[illegible]
峯のもみちは[illegible]

大井川[illegible]流れくる紅葉はかは[illegible]
修理大夫顕季
あらし吹[illegible]いはねの音の[illegible]
もみちをしからみかけてやとめん
深山紅葉といふ事をよめる
大納言経信
山もとは[illegible]
みむろの[illegible]
紅葉[illegible]　神祇伯顕仲
[illegible]のもみちやちるらむ

ゆきと乃里ハあらしにさえて見えし川

大井川の逍遥に水上落花といふ
事をよめる
藤原俊成
ちりくちらふ岩波をとつゆかるもなるハ
筏のあとを花もなかしられわ
後徳大寺左大臣
小倉山峰のあらしの吹のまゝに
たま乃かけりしもゆふさつくわ
落葉落花ハゝくいつ毎もれちるそ
よめれ
大中臣宣長卿

大井川ちるもみち葉にうつもれて
となせ乃たきハ音そきこゆる
落葉隨風といふ心をよめる
太宰大貳長實
ことゆきにみ山おろしの紅葉ハを
あらし乃九れたよわすくみつる
九月盡のこゝろをよみける
中宮亮顕輔
ゆりかわハ里乃山辺ちる秋きわ乃
おもひけりすらゝこえとすらん

草乃葉にはかなくきゆる露をしも
かたみにおきて秋のゆくらん
源師俊

九月尽日大井川にまかりてよめる
春宮大夫公実
おしめとも四方乃もみちはちりはてゝ
となせそ秋のとまりなりける

金葉和歌集巻第四

冬

承暦元年清涼殿上乃をのこ（ども）
殿上にとこころわけて講清のさまつかうまつりける
はけふをとゝめてよめる
源師賢朝臣
神無月しくるゝまゝにくらふやま
したてるはかり紅葉しにけり
従二位藤原親子家草子合に
けふをとゝよめる

しくるゝころのみ山乃紅葉をそ
いろいろにそむるしもなけれは

修理大夫顕季

ある人ゝ百首のうたのよみ時
もみちをよめる

権僧正永縁

山川乃水はせにかはらぬしくれつゝ
もみちの色のみなかれてそゆく

[illegible]

藤原[illegible]参河

神な月[illegible]
しくれ[illegible]やまの[illegible]

後朱雀院の時霧紅葉を
よめる

中納言資仲

もみちする山は秋霧たちこめて
龍田の川の[illegible]

大井川[illegible]紅葉をよめる

平[illegible]

おほ井川[illegible]もみちを[illegible]
[illegible]

落葉をよめる

大納言経信

三室山紅葉ちるらし旅人の
すけ乃をかさに錦おりかく
竹風如雨といふ事をよめる
中納言基長
なよ竹あれのよ袖をさへつる
ぬきとめぬ玉よりもろく風としもなし
百首哥の中に芦花をよめる
源光清
なにはえの芦の花の
おもひかへして

百首哥の中に紅葉をよめる
源俊頼朝臣
立田川きしのこすゑの神なひの
こむらの山みちもみえす
おなし百首によめる
皇后宮肥後
うきよりの川風に萩の花
ちりしくえたのつゆや
月細
つゆけき
大納言経信

月きよみせゝのあしろによるひをは
たまもにさゆるこほりなりけり
旅宿の冬夜といへる事をよめる
たひねしてかくよはとこゝにてゆめもみし
とゝろかりのちきりゆふかね
関路千鳥といへる事をよめる
源兼昌
あはちしま通ふ千鳥のなくこゑに
いくよねさめぬ須磨の関守
水鳥をよめる
藤原隆経朝臣
たのみこしをゝはの音もきこえねは
葦まのこほりもいつしかとけぬらん
谷の水ゆきもとゝまるといへる事
をよめる
内大臣
谷川のよとみにむすふこほりこそ
みる人もなきかゝみなりけれ
百首歌の中に氷をよめる
藤原仲実朝臣
志賀のうらのをちの山風さえて
こやの池にこほりしにけれ

氷池上月といへる事をよ
める
大納言経信
みたるの池のきはまくてはひを
ゐへとしゝしとふの池まつこも
深山霰をよめる
大蔵卿匡房
たえ霰るの玉ちりぬはやまのかせん
ともへふ山にはあられふるらし
冬の月をよめる
神祇伯顕仲
冬さむみ空にこほれる月影を
やとにもりくるとしもよそわ
水鳥のうへのしもはらひかねさえわたる
太宰大弐長実
こゑはてりハ雪ふみわけくもましは
なふかのこゑ草たちそれまつわ
宇治前太政大臣家の歌合に雪の心を
源頼綱朝臣
夜手まよのこ乃浦風さむく
こたりこゝしてり雪ふりてりたわ

嶺上初雪といへる心をよみ侍ける
前参議尾張
しはの立ゆかとみねのふし
さゝ波ふかひしなほ白雪
初雪をよみ侍ける　大納言経信
たつ雪ハ去年乃葉しけゝ
こや小松原の冬のしもとし
前中納言　持をよみ侍ける
源兼澄
めくらしもなきをみねはつらんにたえぬ
つはねの雪をとふらひしひて
齋持をよめる　後頼
あしたのなとわこゝをみさへ涌のゆきハ
風もしともなりゆやかへつまてゆき
中納言家持
こゝろよりやつゝ野花を乃にほふ雑
さくらハわの人ハつらゝ秋
百首歌の中に雪のあさをよめる
大納言匡房
保のそりもなきとしの松山なすこゝろ八

こゑ乃たえ河音もいかゝ秋

宇治前太政大臣乃家にて雪の心
をよみ侍ける　　皇后宮摂津

ふる雪に杉乃あを葉もうつもれて
しるしも見えす三輪乃やまもと

　　　　中務卿女王

おほ代乃もとゐ見えし松にかゝる雪は
あさしもとさりしやあらんとすらん

大嘗會主基方備中国のうた
山をよみ侍ける

藤原□隆

雪ふれはみやこなる山の木すゑまても
ある名たかきのころ花咲にけり

雪乃歌とてよみ侍ける

　　　　源俊頼朝臣

本手乃とこ見えてゆきしにしつとも
かつらきの山の梅はさくらにかつ

雪乃落葉にむすひて氷にしつく
まきのもとそよし乃かはつれはまかせは

まそ流のおもはかりける

六条右大臣

紛ことのかくこの峯了おもほえ
雪こそはとしもいつまてきえめの女
をこの海ちさしよもあれ

皇后宮権大夫師時

をこのまてり立りふわせて人小野山に
雪気のゝ雲とやんねつゝたゆわれ
百そニの中てり雪をとよみあれ

隆源法師

敖ふま雪ぬるまぬるまは志つのうき乃
まきのそはやまは語りてゆきのん

皇后宮肥後

名もなくつもりる雪のかくて
あんめりまたえりのうかん
遠子歌のうりのはあまりおまりは
は雪のふるそらつりよ春のあり
まりつ夜年そめ春遠をまちつる
新乃まりつゝやかもゆるゝわかれ
厳上乃みはさもしとつゐあれ

藤原兼成

まきかしし面隆よちやいつかわん

ねと雪といふもひとつのわかれかは

冬の月をよみ侍ける

源雅光

あらち山冬（雪）のゆふはれたつのかは
ちらさてもしつまれよひの月かな

前頼綱朝下のこの山庄にてやま
しの篠すりかくてさら一両と詠て

康資王母

榊葉や立まふ袖乃おひ風に
なひかぬ神いあらしとそおもふ

神楽の心をよみ侍ける

皇后宮大夫 師時

神かきのみむろの山にさゆる夜は
ねさしてつるまぬ榊葉そなき
影をよそせ給へる

三宮

流るのみなそこにしも榊葉はたえさる
むかふこゝろはのよるためのまわり

小松をよみ侍ける

前斎院六条

中くに霧のたえまそかくれぬるそや
そらのかよひもしられつらん
池の氷を隔つ　前東宮内侍
あまの枕いつくよりきえてたるらん
水澤田の芦の花ちらしとは
影もうつ　隆祐朝臣
こころはほのに思はゝや中まことなき
さらぬたのしも夜のうちの猶ぬ
花まよりそますさ待ともなきを
ふるきぬ　内大臣

なふとふく年のくるいかりしと
花の枝のてりまてて待ぬ
嵐そのこころはなかぬ
藤原成通朝臣
人とはとく年こそ惜やと
まちとふなるかなかるへき
霜月の十日比に桜咲たるを
やかて名を詠せさせける
侍りつるに出家の後とかにわかに
ためぬる　藤原永實

あかなくに雨ふりしけはゆくはるの[illegible]あはれ
きのふもあらしき花のさかり[illegible]
山ふかみ花[illegible]ちるらん
まのつましくれとて
歳をへて乃こころをよもゑく
三宮
あすよりは草葉[illegible]
[illegible]
花は散りけり
木の下[illegible]
中原長国
今年[illegible]
霞乃えにもつゆ[illegible]
中納言國信
何事を[illegible]
こともなく[illegible]
[illegible]

金葉和歌集巻第五

賀

長治二年三月五日内裏にて竹不改色といふ事をよませ給ける

堀河院御製

千代ふれとおもかはりせぬ河竹は
なかれての世のためしなりけれ

郁芳門院乃根合に祝乃心をよめる

六條右大臣

萬代をまよのせとなるへし石清水
うつまためしと君をいはふかな

堀河院御時松契遐年といふ事を
よめる

大納言經實

水乃面に松のしたえのひちぬれは
ちとせかい池乃こゝろなりけれ

禁中にて花をもてあそふといふ事を
とよめる

中納言宗通

九重にひさしくにほへ八重さくら
乃とけかるへき春乃風としるや

長延年といふ事をよみ侍ける

源師俊朝臣

萬代とさしてもいはし桜花
かさゝん春乃かきりなけれは

橘俊綱朝臣乃家の哥合に祝
乃心をよめる

藤原孝善

をとこ山みねのまつ風しらなみの
をとにきこえてたえせぬる

君か代にあひてしもあまりしらす

百首乃歌の中に祝心をよめる

源俊頼朝臣

君か代は雲乃上にてかきりなく
なもまてとゝめさすとも

祝乃心をよめる

大納言経信

きみか代は乃はるかに
松をこえしらなみのかすもしられす

後冷泉院乃御時殿上歌合に
祝乃心をよめる

永成法師

君か代はしら雲かゝるつくは山
みねのつゝきのうみとなるまて

永萬二年三月爲政乃行幸に從
上乃花といふ事をよませ給ひける

堀川院御製

池水乃うへにこそみれさくらはな
乃とふもありし千代乃ためしに

大嘗會主基方屛日冬音聲歟
山をよめる

藤原以經

音るゝりきつゝゝ乃山乃ちらりへ年
たえ乃しるしに代ゝとたえすも

悠紀方稻日山をよめる

藤原敦光朝臣

墨云香ふとまつ乃あゆりよふるをまつ
絲日乃ひゝきのわたしをふ

己口樂破万雄琴乃心をとまる
松風乃おとにかよふをみそ
おとこのしつ代乃かりいきにゆく

後冷泉院御時大嘗會主基方
備中國二万里をよめる

藤原家經

ゆつきもの乃ふしみよに
萬代をかそふ山にそ

しかの里人へのさそはれはよしくわ
おちの国のいなみとしらぬるをたえ
人ならなくにさよなかなれ

二階明教

萬代の水いはゐにうつせしは
たえやまけふちきる君か庭の
従乃ゝ鷹司　皇后宮殿
いはとなる風のこゑにたえぬる
ねのさしてこそあさきこのみなかめ
花葉追年とこしなへにかはるなる

太宰大弐長実

花もみな君か千とせをゆつるまゝ
いろはまさりの春やしりなん
摂政左大臣かねよしのもとに春日
参使に下つけるかつて　周防内
侍しときそはわけるくれる為
従ゝの事家にて人待ちあそひ
流かるしくれ

周防内侍

かすりは神ともなりしとこのもと山
松の葉の雲乃子の代のまでまちき

題しらす　菅原在子

君か代はいくよろつ代をかそふとも
いつゝのまき川乃千歳乃けふそも

宇治前太政大臣家乃哥合に祝の
心をよめる　中納言通俊

君か代は千代乃ころもや孫乃代にとれ
いはひそめしはつ子のまつとしも

大納言通房

君の代はへくもとしあらしみつのとし
よなよな鶴乃とはくもにかきる

新院少納言に若ちよの松もたえまなきと
いふ千年をちきる

大夫典侍

藤なみは君乃千とせ乃松にかけよ
のこしておくへしこゝろ人かはる

祝乃心をよめる　源忠季

君か代はひとゝ乃をしかは乃水すゑなかく
千とせをかそへもしらくもかくれ

宣陽門院乃家乃哥合に祝の心を
よめる　菅原為長

大川のきしの松かえたえしなくさきにそ君か代は
あまてる神やまもりつくらん
おほきみのみかさの山のさかえ行ことしもゑたそ
承保の夜の御歌合に　藤原右大臣
もゝくさのはなかりしかも
宇治前太政大臣
ねのひするのへのこまつをしるしにそ
千とせのまつのいろやかはらむ
在し　藤原右大臣
はるもあきもしらすてへしねのひつきせぬ君か代は
松の葉もちらぬはたえしくもゐの春
天喜四年皇后宮の歌合によめる
よみ侍りける　後冷泉院御製
あまの原海のきしなみのねもおなしことは
つきせぬみなもとをたえすやみわたりなん
雲の上の雲とそよふ事をしるらん
源頼綱朝臣
万代をためしとみつる松のとゝ
かさねて流るゝとしをちよにかけて
君か代はつきせぬものときくの露

いつのまにわかれし今宵やかくはまて
きゝせ給へつゝ従のいをとゝむれ
源俊頼
くもまにもおしとりのなれはつる
君かへるうきはつよまれけり

萬葉和歌集巻第六

別離

萬葉の歌の中に母にわかれてよめる
のほれのつくる
大納言經長
君こふや萬葉の散のもとをあへすめ
萬代のみくりいかくこうのまゝ
ねて
藤原忠季朝臣
よしはなりきくなころもふかきなる
おもまろつ名をもあらしはつかる
重尹師とてわかるゝ時人のもとに

まよふらむけしきなきまよふかな

堀河右大臣

帰るへき旅乃かりねとおもひしに
わかりたるふみちるわかるゝ

顕之くに　よみ人しらす

めくりあふそらゆく月のくもゐにも
たなひくしらくもやとゝむらん

源兼昌

なかて下行くゆき時雨

上東門院

またれつる人きてもなほ

皇太后宮大夫俊成

うらしまの袖のわかれのあさも
おもひあかすしらぬわかれに
見しをたのしむのいのちの秋
さそはれて

上東門院

別にしそこに見しる人
きくらく袖にめつるかな

源兼定の大すみの雪ふかく下あつ
時有かあはれ夜別そしらて
よしなし

源為成

そま野のなかに藤乃花さきてはるかせ
うらやましきは娘乃ゆかり月
紅一重まとふ小櫻乃あはれみちのべ
にさけはなかりしもの

安藝須女

おほえ山路す雲井乃まきのといつまて
ゆきかよふ小さゝん西にほかふく
俊頼朝臣

伊勢乃海すまの浦のあまの事なる
こゝろもまた(?)の時人にたちよるかな
しらすとも(?)あはれ

参議師輔

伊勢乃海つり小舟さしつれて松(?)をと
あさなきの浦にくれて海またとなりぬ

源順宗

待つ人の今も来ぬかとこゝろにそ
ほとゝきすいくたひ君をまちもしつ

百千鳥乃声よりまさる都へ

中納言兼輔

人ふかきはさかひ乃わかれともしあはれ
あさゆやしらぬやまたつけくる事

藤原基俊

好きの之りのまとめつゝ君まつよはわ
すゝしき思はゝそはれぬめくらき
松ゆる伊勢乃小嶋へまつわたすよ
人まちわふる心けしはつかしよ
ありあけ

藤原実経

人はいさわか世はまた秋めし八
まちあふとものちいのちまりへき

藤原有定

こゝちせは八乃人のはまなしも

うちさくらそうふかけりいまさかん
つきもまた乃にはうつろはゆかしす
うちてるまかひとそて公實卿女
へ流りしあはれ

中納言通俊

ちらぬ乃ほまれ君をし思はん
うつりそのたつくるな
夜の

春宮大夫公實

ともわかぬほしのうへも
君をまちゝしはしまつ

ちきりしさへまのわかれの時はなとこゝの
関のいはかとなかれのしみつなほあれ

橘光朝

我のみとわしるくと思ひすまるあかきほ
つきぬまことなき梅ハ

ことしわれはさ（?）かり

金葉和歌集巻第七

恋上

五月五日はしめて女のもとへつかはしける

小一條院

さつきとはわかお袖こそぬれけれ菖蒲草
かりそめならぬこゝろからするあさきものとは

女のもとへつかはしける

大江公資朝臣

しつのをゝくるとまたはいはてしのふく
いのちをはうらみてさへハ人さりきりきつゝみ

暁乃恋の心をよみ侍ける

神祇伯顕仲

さわともとおもふのきはゝしのゝめの
とわと似せてりくる吉いそきつゝ
涙まさる事はわかれの女乃もとよりつかはし
ける　春宮大夫公実

こよひしも思ひはなほそまさりける
たのまれぬかへすはいかゝしのふや
別年思ひて常ありて人ゝ恋乃うたよみける
ゑまよみなれ　藤原顕輔

あふことゝみをかへてとも乃いのちいとゝおしける
よゝをへたてむ夢之命をわかるゝかな
女乃もとへもしのひてまかりける　源雅光

ゑせまそハ思ひもよらぬのちにこそ
いそきしとくるよいふをききかな
従二位藤原親子乃道縁会に恋の
心をよみ侍ける　寛源法師

とこよのまくらちきりのなかもとにかな
是つゝおなしく人まつねやのとおもへは

太宰大弐長實

おもひやれまれにあふよのしのゝめに
うらしく袖のつゆけさを
招しをかねてや女郎花のこゝろのきよきを
みんとのみこそ人もとふなれ

清輔朝臣

敷妙のうたたの手枕またたゆけぬ
くもゐは都人とやかくこそみゆ
鄙しもゆふべ人せつかれ
鹿のなくふもとのさとになかるゝ瀬川
つきかけもやすらふ人もなきやとに
何事を思ひのこさんかなしさに
恋しさのこえはとはるゝのなきは

中納言雅定

あふ事はいつとなきさの浜千鳥
なみのたちゐにみて音をのみそ鳴
あはれなる宿にはかはる人の思ひて
宿をさしてあやしの小屋に招
しらぬ身乃日清のしはる

大宮大夫公實

思ひきやありしその夜の呉竹に
あはれましりしふしそかへらむ
寄七夕恋
とふへきものをちかひをたのまるゝ
少将為教母
七夕はまつこよひ頼もし大乃もちきらん
あまたよもしきつゝめくりとめらむを
寄水恋といへる事を詠る
源師俊卿
水くる乃なかれはせしくもしく波乃
はやしきまゝにもやつれ袖のうら
寄夢恋といへることをよめる
大蔵清經重能
夢にたにまたあふことはかへしませもれ
まくらははしきうきためしとも
寄雲恋　中納言顕隆
しら雲のやま山のをこそ
いとなくはかはつらくよなるらむ
中納言俊忠卿よそにたのめてまたは
ぬ恋の心を　源顕國卿

逢ことゝたのむもきほは夜暮るゝ
あやしやいのちまたなかるへき
思遠乃こゝろをよめる
中納言實行
谷川乃人は來ぬまはきよけれと
すめるすゝしのみともすめや
翫月遊人といふ事をよめる
藤原基光
ふくむ秋はこゝろひき人乃遊ふかな
くもゝなくくもなき秋乃よの月
題しらす　よみ人
はかなしとおもへはしをりそむれとも秋
いかなりとそとき人はなきものをせん
もろともに人しれぬまに月をみて
まことは名をきゝそ遠く月をみるかな
うれしき夜をいりつゝみるかな
藤原知房
雨新にうるほひみなかそれはまそ
雲井乃月乃秋たまともなるゝ身乃ん
ことわりの月なれは久しくも言語

遠き里なる女乃もとにかよひ道
はかりける　よみ人之らす
あさく雨やふる乃ゝ道乃たもとかりはるま 草
ちくまは河のみ乃すゑもをちこちのきぬらも
よそにわかこひしつゝ人のそ
もと人流るゝしからみかな
内大臣家小大進
梅さくらおもひそめにし思ひのたまくらは
葉乃もとちるゝをとはこれそいかゝ人
重家乃歌合に恋乃心を
よみ侍ける
長實卿母
志るらめやよとのつき橋よとゝもに
つれなき人をこひわたるとは
藤原兼経
恋侘てをちかふる袖やらすしはる
すゝろ乃川乃みをともたえなん
大納言公教母
なかれてく乃名乃み立之めくる海川
人めつゝみをせきもしあへねは
題志らす
皇后宮大夫家限

なみだ川袖のゐせきもくちはてて
よどむかたなき恋もするかな
源雅光朝臣

ふくとたえまあるべくもおもほゆ
むねのほかにはけふわするなよ
女乃もとへ遣はしける
藤原顕輔

こひしさをおもふ月乃国まではたのむ
ものからつれなくてけり
左兵衛督實能

なかなかにまたあふことをしはしまたむ
あさかやまかげへとはまるましきを
後朝乃心をよめる
源頼家朝臣

はかなくもなほこひしきかなうきよも
かはりぬるかたのうつつならぬ
摂政左大臣家歌合によ
める
左京大夫宗實

思ひあまりわびてもそへんとわびぬるに
こゑのうちにもなけたえぬのさらに

恋のうたとてよみ侍ける

藤原顕輔

年ふれと人もすさめぬわか恋や
くちきのそまの谷の埋木

何はましき人を思ひけるよ
めくらん
よそ人のをは

ゆすよしと思ねこゝろあまこてそ
はかなし袖よわかあまりなこゝろかな
淀の野へのしせおもふしかは
逢よ猶そ袖の涙かくれのわく

秋は

大宰大弐高遠

夜もすから草の枕におく露は
ふるさとこふるなみたなりけり
野分せしわかゝよひの間音
はかなく人のふるさとせ
きゝわかれいはつしかまし

相模

あさまし月の夜はわかれつる
くもてまきしいとまや有明の
国にての秋の合に夜の恋の

いさゝかなれ　源俊頼
おとしもてりきちる床乃けの枕
見えぬそや人よ夜半まてくらきを
五月雨の日かすもつもりても出すなれ
まことにとはれ物をはなとしもわ
しもつけするとにいのつ
かしりなれ　相模
あやめふくたのまぬまことをは人衆
かわのよるぬきてもしろきむかし
洞五月はらなれ年人をつけ
くらまは乃五月雨そこなとや
けれいかなる　梅香通
あすもつく恵は日に早てあやめ草
たゝなるなよむく五月雨の人
人のもとて流るつしかなれ
神祇伯顕仲
さみたれのつゝみしくて顕のさもへ
深乃うきはよるこまきてしや
人をとうしめて流のうしかなれ
藤原惟規

池まてもかけをうつしてのとかなるも乃とものかやへさくらかな
宮ことそのかみしたもせぬ
人乃もろてつりしあれ

相模

あつま路もきせをのわたりなくさ
人まつとはいふ乃をちとしも
女乃もとへゆめわたるまてさすかに
見えしいまはのまよひかな
ふ庵ハいつみかはしかいは

のりしあへ

藤原正家

梅風ま吹たへとる葉の末乃
いろかはりぬるしかる
みえしはつる人をあふのそらま
うし見る事はあまりいはし

藤原有教母

流れける
さるらんとももそちらんにつま
うかりてともつなよりあし
生ひて家乃立の会ま道乃かつさ
めくる

藤原忠澄

はかなくもなすらふの名をしのふかな
恋しきなをもかしはけるかな
人をとふらひ侍りけるによみ侍る
藤原惟規
浦風はさそふこゝろのやちくれり
しらみそもなかたのまくらかな
なをさりにたのむる人をしをりける
いかなる
右大臣宮内侍
あさましやみをせ瀬もしらぬ名取川
もろともにしらぬかものとや
年をへてあひみぬ恋の心をよみ侍る
大蔵卿通俊
一夜とて山のこなたの竹川に
ながれてまつとおもひしものを
後冷泉院御時恋十首人々によませけるに 相模
不逢恋といふ事をよみ侍る
皇后宮式部
年をへてあふ事の後つらきいのちをながらへて
こまちかわりほとまゐる恋すまし毎に

実のへ乃宮此新合に恋乃心を
よめる　源俊頼
はつとらくこゝろにこゝろ我かよわ
こひやあさく思乃しつかなるらん
恋乃哥とてよめる
藤原成通卿
夜乃あけてちらきはしる人もなき
こゝろやとおもひしふくはれぬる
按察左大臣
いつあかぬいまるらん(?)あかし乃緒をさきそ
はかなしと思ひとれはしらぬや
かつ(?)我ゆかぬ人のうきにはかなく
うらみしかけれはなかめのみする
白河女御越後
待恋乃心をよめる何と(?)歎くを
おもひたれともしらくなるを
恋乃心を人にかはりて
律師実源
命をしなからへてこそ契りしか
たのむるはしめなからへる(?)

皇后宮美濃
あかてこそ離れめにてとゝかよの
といふらむ人のしるしもなし
諸行悪莫心をさとるめる
松殿大臣
わたやる衆悪殺乃くちまくら
ものふのしくる縁の乃けしきを
皇后宮よそ人に恋ひそのかよわ
けりそへりする殺る文恋とひる
事を語る
皇后宮美濃

恋ましも人のいはでいかにせめてしりい
もしらのさ思ふ所つらむ人ひく
人は悪語やませにけるをしも人を
のいかそ
松殿大臣
いかにしあしくちのちゆへりなき秀なる
たちきそのそりとふ人のしぬれし
之日よりひかの恋をとかる
藤原為忠
よりいのりゆゑりけりはれりぬ人の
あらそはやまりりのきし

君恋乃心をよみ侍る
　　よみ人しらす
志らせはとのいもふきちる乃緒
なきのこまるもとかくのみ
雲居寺乃歌会に恋乃心をよみ侍りける
かりねそ
なきものゝためしにまかふかわ思ふ
色のみえともひとりこそなれ
　　三宮小大進
寄花恋といふ事をよめる
　　按察大夫

あるとまつまてしもいかてそ人の心のまつるゝは
むしもとなにかは乃あとにかへるまて
百首歌の中に恋乃心を読る
　　修理大夫顕季
恋ハいつくにもえあわくへとひ葉乱れ
しつはたのほといさゝ人の心ちめ
按察大夫前恋の心をよめる
よめる
恋ゆゑ思ひ入るの山ふかみ
　　源雅光
いつか月日の花はかりそめ

流れなかりける人よりも
夢さへみえて流のかしくらふ
藤原公教
うたゝねにあふと見つるはうつゝにて
つらきを夢とおもはましかは
俊忠卿家にて恋の歌十首
人ゝよみ侍りけるにあはすとも
まつ恋といへる事をよめる
源俊頼
思ひ草葉末にむすふ白露の
たまたまきては手にもかゝらす
をとふをさへしらてやかへしのつり
くらふ
春宮大夫公実
あしねはふ水の下とそ思ひしを
冬はふかくもあらはれにけり
重服にてはへりける人に立ちて
つかはしけるまてそらんとかたるまく
まては流のし
くわおし
梅後宗女

立のこすたかはしとあはれなる
わかれにし人のむすめとおもひ
人ありのゝよくそしのひて
ほとをさしあはせ

前中宮上総

ありしるたなふ乃水上やゝくわ
まとりあふつゝ立つるかに
まよいし次

皇嘉門院別当

たのめこしことのはたにもなき
なすくもあらぬ狩ふ
千夜乃いのちをかへて

金葉和歌集巻第八

恋下

しのひける人のもとにつかはしける

良暹法師

こひしさはおもふにいひそやとゝめ
まつのこゝろはよそにゆくかな

為忠の朝臣の家にて恋の歌
よそ恋といふことをよめる人にかはりて
ほのかなるよそめはかりの人ゆゑに
きみをこひつゝなにゝくらしつ

むかしよみける

藤原範永

恋わふる人よ人をとめや松の葉も
下わ葉にもあまりおちてそ
後朝にこそなかきよるの

源師俊

志のゝめのあかつきもおなしつゆかな
あまりくるしきよりもなかりけり

忠の月頃恋といふことをよめる

は

内大臣

いとしろきあかつきにこそ
月みしとしも契らさりしを
恋乃心をよみ侍る
藤原則輔
恋わひてねぬよの床はしきたへの
枕さへうとくなるわか秋
為家卿の家の会に恋乃心をよみ
侍る
藤原仲實
夜とともに袖乃みぬるゝ恋や
そをしまのなみよりふかし涙

夕暮乃恋といへる事をよみ侍る
中納言雅定
今まては事をこそよそにおもひし夕暮
はつかしの山乃端もうしかなしき
恋乃心をよみ侍る
右兵衛督通
山乃井のむすふにあかぬ心地して
あさくもしらるゝかすかなる
皇后宮にて人々恋の心をよみ
まつりかまよりよみ侍る

大宰大弐長実 なかさね

みち乃くの思ひしのふによるの月
こゝはのまゝにあれ乃雲思
あるかそへ人こゝ百乃との心け
よなまさるみちれいとともあまる

権僧正永縁

おもかけをたれにあらん人乃かもりも
あかぬなみえ乃うちよりきなむ

恵乃こゝはをとるふ

俊恵法師

花さへあかもとるめくみ記世まても
いつもしらて恵のくもふ
源家時のきしきに成られてを
うしかくそ流のしるあれ

大中臣輔親

人こゝはあそくは水乃かけれ
こゝふくわよもつまのほかれ
俊恵の子まて恵乃歌十首入
くはらまよ立中てこふと
いくよまちとよめれ

修理大夫顕季

ほともこの秋たちきしかな
さ乃よの花もあき乃袖はぬれけり
ゆくへしらぬ人もあらはや
あかつきとも人のたまくらも
うきねのしるしなき

よみ人しらす

ことはりや思ひつゝ梅乃山をこえ
まほにもあけまもなき花をみるらし

郁芳門院根合に恋の心を
よみ侍ける

周防内侍

恋わひてなかむる空のうき雲や
わかしたもえのけふりなるらん

人をとふらひそへて五月五日に津の
いひつかはしける

前斎宮河内

きのふまてひきのこしつるあやめ草
たくひわれそめぬ妻とこそみまし
恋乃ねをとこそなけれ

大宰大弐長実

つらきをもおもひもしらぬ
[illegible]

恋しとハいひそてわすれしとしらん

題しらす　前中納言匡房

せく袖乃なみたもさらにわひとしてなをも

人めつゝむと思ひけるかな

恋歌よみ侍りける　源俊頼

わすれ草しけれる宿をきて見れは

おもひのきよりおふるなりけり

人をしのへはよなよな

読人しらす

とはれぬ思ひもありしかは

いかにしたのゝおもひわひ

命をもありそとまふ逢乃もとよ

めくる

左大将良経

なき名やあらしのいなかよ

ほのめかしてのとふのつれなしとも

人をこひわかるはなれて

おほしくのきは人あはれ

わかあはれ　読人しらす

あり後もとふむかしのよは思ひ出ぬ

もねへい乃ちなきし人ゝと
女乃もとへ遣しける

藤原永實

まつ墨もおもひ海よあらてく
らしとたましゐきわたるとも

家の哥合に戀乃心を
よみ侍りける

中納言國信

くちみてめんかくれなましとも
なけきはえらきの乃いとわかれ
思しのひくる出と不知

逢事は夢ならわりなくやとゝまり
こゝろくしのと人よるのみか

大納言經信

あしのきよ深くつらくも乃
物思ひつるきさのくれの

藤原忠隆

せきもりをまたしとあまの海いよる
なにおもひつらしくあはぬ
人をうらみそ歎くつる月をみて
こよひあかね

越後守女

めくりあひてみしよは紀乃海ハさしくもと
この世乃月乃かくれなきせを
枕にも人しれすこそつましけれ
なをさりにわかれしはいつ乃ことか
中務宮明陵
萱(?)ふきの乃こやのすまゐ(?)ハ書(?)きつゝ(?)
いたつらに人をもまちていたつらにねぬ
夜乃ふかきをまつ
左京大夫顕輔
秋(?)の夜乃おもふにまかせわか乃みちに出ハ
いかにせん人よりもまつしものゝ
色(?)よりも郭公なく(?)ことに
なき(?)声(?)たにもいまハ[illegible]
さやとりもなくかたにや
長家大臣(?)
郭公雲井乃よそにすきぬなり
はれぬおもひ乃さみたれのころ
冬乃夜のなかきをおくるそてぬれぬ
藤原成通
水乃上にうかふかせこそみえつれ

羨やましく人のつてもくは
たえんと中の契りならは
流れもしき涙のかへるわかれは
月影のありて見えける夜ぞある

権僧正永縁

待人のこぬよは月の影さへや
ぬるまでたのみし秋はいでまし

寄水恋意をよめる

摂政左大臣

年をへてしのぶはさもあらばあれ野路

うき名をたつとも人はいはしや
人をうらみて袖ぞ流れける

菅原道経

ところのまやは我身のうきのみぞ
人のつらさをとはぬなりけり

摂政左大臣家にて恋の心を
よめる

源雅光

なかなかに我身のうきを恨みんかは
みるめいつかと見えしまに
いとしきや人をみるめもなきそかし

むかしの思ひ出なきにけれはよめる

前東宮甲斐

しく人なにそと偏(?)乃山にまて
るとしるへき思ひしるらし
折にふれ人乃えしよそわたれは
思ひ出あり音にたてしなくなれる
いにしへのかなしくそある

梅壺宗女

めくりあひ身をよそになしはてゝ
いくたひ思ひ出乃

山乃ゐの寺にて恋乃心をよめる

よみ人しらす

あさくのまゝ色夜ハ昔夢乃心にて
恋のもつらきは(?)なれなん
いそのと思ふ人恋ともやみぬる
知はさらぬる人乃あはぬまなれ
をとやのてらぬる

中原重経

恋涙乃身をもかへてやふなき袖に
いつはりなきよしもしらましのなれ

いかなるのもとへなかれしにけれは
もろこしけふこそはるかなれ　中納言資仲
あやしやかへりゆくはるかれてゆくか
なし
伊賀少将
たかさこのまたまつのたちるにしくは
なかはのみえあかしらけのやうなるを
あなあやしあやしわか月にあひたてまつる
ほかにあるましきあはれとて
もしへかくてとあはれ

梅壺宮女
つきしもと思ひけるほどの人こそ
あはれいかなる月のあはれの人
歌しらせ　上総侍従
あさくまちやなかるらむとはよそに我身か
わかれくいはむはかなきこと
ねへはわか身なる道つたえてねたる
乃そたてはるとさはなたみ
上東門院よりはなれてはかなく
ろとしへたのへともかねをあはれて

はかなしやまし　源縁法し
なきくわのこゝろしらつらんはなほ
いつはりのいはぬへつるまて
恋乃心をよみ侍ける　民部卿長家
こひしなく絶ぬ思ひのたくひなりけりや
たのめしはいつの言の葉ちりなん
女乃もとへつかはしける　大納言経信
あさ事はいはれともなをさらにさそ
さつぬ命ありしともみえぬかな
ことわりて女房乃もとよりいひをこせ
おもひやるすかたにも中々にいはてあるかな　藤原顕綱
人まちしほとはふれともいかになりぬらん
つらきこともふりしかとめくりあひては
勝にうせ侍りける時よめる
もとめける　中納言
人しれぬはちかひしことのはなれけり
あさ乃よろこひはいかにせましかは

在し　　　　　　　　　一宮紀伊

年とりまくたかしの濱乃あたなみは
かけしや袖乃ぬれもこそすれ
為さまいたるゝ波とたのめる人
めくるゝ月乃あまた人て[illegible]
[illegible]　　権中納言匡房
奥山まもみ乃人乃かへよ[illegible]
たちぬめぬ月乃新[illegible]
山の[illegible]　俊頼
[illegible]

めぬまんへよあかりそへとなつゝる川
なよのまそくやも思ひの侭のふ
新院[illegible]
乃いをらあつ　　源兼昌
かふ[illegible]乃[illegible]
くよ[illegible]
高乃[illegible]出羽[illegible]
[illegible]
道[illegible]
[illegible]とも[illegible]

なし　大納言経信

冬乃よ乃雪気乃空ニさえぬれと
ゝのわかふりしくつまやいぬれし
家

梅　ちりさきてゆめ恵とゝ人のおほかたと
ゆめゆめ

右兵衛督

梅かゝ咲乃のきにもゝまつ誰
いとゆかしき経をしらぬ
をまよふ人のきわけてはまつと探
ゆめ人若えつく音にもわかる
きこゆる　よそ人さつゝは

人のゆきくれおまへもやとる人乃足をりしも
とりきぬゆくへもしらぬ体を
とほ雅けりいにしへ人乃経て音にも
まつゆきはなかしけりそむ
さやゝくわれあそこにれ梅をそめて
思ひつゝくらしゝやまのはに

題しらす
もゝちとりや細谷川乃おと
家のみちぬ遠くりしつむかな
おとこ乃人のかたくにたの人よきまつる

とりのねは流れつゝりもゆゝし

君には一夜めくりの袖とき
かりねの衣たにうちて

後朝恋といふことをよめる

藤原顕輔

あつまくは枝つゝかへるあらしの月
ゆきくらへきいな紫のはし紀
人恋しとのわかれめ袖のめく
とく風と見えさやとまたまろし
きいりつゝりかな

皇后宮かね

うちもともこそあまよもあらゆへ
あまりいあまに涙袖めつ
誰君の恋といふ事をよめる

修理大夫顕季

ふみさしもしきさへつゝめやまさりて
山のねに袖めつゝはとは
人の夕ぐれもそらんとやはまてく
まつはかなき

一宮紀伊

うらむなよかけみえかたき夕月夜

おほはなくうちぬる雲の上まてそ
荒人はそ侍ける女のもとへ
かきもそへまかりけるによめる
藤原長實
三乃月はおほかたの人のいとゝ
まちつゝはなしいつかは雲乃上にや
因幡内侍之をしく成て後にめし
まゐもこゝろはしとしいかゝある
源信宗朝臣
あらぬ夜は涙とのみそむすひつる
夢よりもみきと人にかたるな
なき名立とこゝろまちとよめる
左京大夫顕輔
人しれぬなかにたえてしはてば
そをみぬ袖のかはくまもなし
人をとゝめてよめる
大中臣輔弘母
あちきなくもえる月のかけ
今は行末とゝまらすと思ふ人は
三井寺にて人々に歌よませけるに

まよふらん　　　　　僧都公円

ほしとも見ゆ人ハ思ひなん

ふるさとはよろつさかりをまさ

なにはめの女の袖ハ今のみとも

たちぬともなくかきわけて

かきわけてゆふは五月雨のはれま

まよひゆくへの人しれぬ

五月雨の空たのめなくかへるらん

わすれゆくなほをおもふかな

花　　　　大宮権亮賦

見しをりの人ハ今ハかゝるかな

いそきのちの乃さやまかくやへき

郭公　　　清輔朝臣

おもふ身の乃あらしの風もをきぬ

おもひきやさくらもさかりみえて

見えし　花山　あらしのまつる

かへるさハ花のかをとをもつらね

清輔朝臣郭公　きつゝたつね

君かよにほのほのしきわか秋

こまつにふゆのけしきかなりな

君か代にあふこ乃はしもちよにたつき
春こそいふ名にこそ梅は咲きにしと
いつはこよりまもとめ里
清乃玉鈴やゝ人にも田のは
君ゝ清らきせには乃錦しつ
春くとも乃山は年ゆるゝ心ありし
見ゆるやきも花ふる清ゝのか
何ふこしを見とこそ人何しか
数来ていくにはいつの世の
こゝをつもる名を見きさゝめてもか

君はあふこ乃はとをもちゝきを
すとまりやこ乃下つ事乃是み侍
いはるゝ人若く数さこゝん
さくゆるめゝこと若くき乃をはる
言くすゝにをいにわやや錦ん
冬も乃はほるゝぬめをあつみ
もゝきすぬる名ふあしかる
冬も年いゝ錦ゝ母るゝそ錦羽
ねふわゆしもかしやすのゝん
冬も華乃ゝ野てしていわめゝゝま

おもふわ乃こゝろもやすからん
あふことのなきをいふかひなきいや思
君いこそわれ人とまかせし
今年はあすのみか尾乃はてにとこ
ちとせのありとおもふさへ今年乃なかめ
あしひきの山乃下ひもとけしよしをしる
あふ乃はなも木かくれにとおもふ
めつ人とふもことらやまと思ふまま
君のこゝろはよしとはまたまれしかま
たのしきはことやまる人をかれ

あふたふくはの君のこゝろはや
君はよしつもりの恋とし人か事もよ
めやすし
大中臣頼隆
あふ事はもとより神にしたかひつきにけれ
身のことはのうへにたにかはぬをしれ
藤原忠房家にて恋のよみけるに
源清光
ねをのみなくあまをさへ河乃ふかしと
いつまてこゝろにも恋わたるらむ
恋歌十三
人に遣はしける
よしとも

とものしらぬとしかたらむ事をそよるなる

修理大夫顕季

玉津嶋よしうつ波乃たちかへり
きふゆそきしめ名こそ恋し
恋乃奇とぞよるなる

春宮大夫公実

あふ事ハかふ人のはこころの
ことゝもの絲はる絶えるまし

前伊勢女

いかにつきたる紀恋をささとらわれ

ありそやとりはまをハいとこしまし
みかしまのうらこしわかなかそ
よるなそうけもなし

内大臣家小大進

あかつきのわかれ恋ゆやいかにおもふらし
めくりあひてけるとよりてみよや
摂政家参河

まなそよあつまのかそへはすあへまとふ

源顕国朝臣

あしたのうらの波乃そけいともちていこ
たゝましおもひのかみいまそ

恵斎人ハこよひあれよまれける

源俊頼朝臣

浅ましやこハ何事のさかへとよ
恋せよとてもむまれざりけり

忠の夢ハ恋とかねし事にてよみたる
ふ

源宗行朝臣（行宗）

はかなしや何のはかなき恋
忍ねあるとくしたのつらふ
後あれそかへりそて恋の将十
そへ人とよみけるふてしかとし

そえ君も涙とともにてなかれかな

源俊頼朝臣

あやしきも涙のうへにかかれなきおもひ
くさことのハ草すりつ
つれにそと思へハ

金葉和歌集巻第九

雑上

むかし道方卿にくして筑紫にま
かりて安楽寺にまいりて見侍りける
梅の我任にまかりて侍りし時
まいりてみ侍りけれは木もいたく
おほかたもなくて花の老木になりて
わつかに咲けるを見てよめる

大納言経信

神かきにむかしわか見し梅の花
ともに老木となりにけるかな

山家のくれの春といふ事を

[illegible]もとの大臣

山里もうきよのなかをはなれねは
谷のうくひすねをのみそなく

圓融院のうせさせ給ひて後之源
後の御事ともはてゝのちにあ(?)
よ(?)佐せ給ひけるに

三宮

うつせみの君なきよ(?)世は年へても
もえ(?)のたもとはかはらさりけり

兼光乃清輔とかいふ妹乃内侍か
もとへつかはしける

権僧正永縁

いまはたゝとふをとおもへとも
いまつくとせの人まつらん
なし

内侍

いく千代も君もしんはれはすみて
おもしろくなまし乃清輔と
大宮すそおもひけす桜乃花
たのまるゝそもかそえある

僧正行尊

もろともにあはれと思へ山桜
花よりほかにしる人もなし

摂政殿太政大臣

花みよ海のうちにあまるなるかな
よし宗都下あまりのにすそ橘や
おもしろくしてなかれひさきと
てらさるゝつくまて心

源行宗朝臣

いくとせよ我わすれんもはや人かな

花のかはうつりにけりな……

山里は人もかよはてもちのゝ露
すみかなりけり　源道信

みる人もなし野の山のさくらも
おなしくはめてもやれはるか理木

後二条院深くしかおもひてはやふか
色の香をたにわかるゝもかたそ

左近府中将秦兼房

さくらちるまのくもにはゆきと見えてかり
華もよりあはいちもとそちわかれし

清きよくさめし乃此葉はもえめしまつ（山下）
秋ことなく何もしいとはぬは

藤原兼仲卿下

としのうちとはきゝつてもみえぬ深き
花乃ちるらしもとの花のかほりや

舞人おもひて臨時祭乃倍従し
侍りけるに右中将中ももとへ流し
のゝしりける

藤原惟信朝臣

山吹もおなしかさしの花なれと
雲井乃桜なをそこひしき

隆家大宰帥にて侍りける時香椎
宮の杉を頭にさして侍りけるを
神主ことさらに杉の葉を取りて冠にお
き侍りて帥の冠にさしけると
なん

神主大膳武忠

千早振かしゐの宮のすきの葉を
二たびかさす我君そきみ

源心天台座主になりて初めて山
まゐりはへりけるに中堂にて下りて
五のとめとゆふくれは清る

良暹法し

年をへてくもりし法の光ゝと
ふかきのひかりこそ法の道
菅家基流されの花人はそのかはらに紹
おもはぬれん又乃ありつかける

菅家御歌

思ひかねしていかなるやみをらん
雲乃よひらく千年へてまた
一乗天台宗に侍りて給て見法
まはりきをゆひつゝ侍るもの人

住吉にて菊といふことをよみ侍ける　源俊頼朝臣

いくかへり花咲ぬらんすみよしの
松も神代のものとこそきけ

思ひ乱るといふ事をよめる　権中納言基長

何となき山田の庵に荒れはて
ひま我をまたんとこしらへん

仁和寺にて何せ給けるにつきて
さそはなむとふこゝろの人のたむけ
かはりしもうれはしくもこそ給ける　三宮

なにとなくもゑひぬるをきのやまさと
ほのかにたつ川霧にかほすなるよ

大峯の笙の岩屋にてよめる　僧正行尊

草の庵を何露けしと思ひけむ
もらぬいはやも袖はぬれけり

ふるさと遠く帰るさなりける事あはれ
なるものの所にてよみ侍る

しらまさるひとしらぬこゝろにてさわく
きこはいひつゝしのひね

権律師慶範

よるのくもふかりのりの月はいはねとも
きよなるまゝよことはつくらん
嵐山紅月とふくかせにまかせてふる

藤原正秀

はせよ山の端の月をそのみ
ゆきとけてかすむもやまとめくきの
山家ありそをきめの月をみてそ清

ふ

僧正行尊

本のそのひゝるひかりの月の影のまた
たかきのわたる思ひのかき
宇治右大臣家時の歌よりとも
そて月の詩をまてかくるよれ
まかれいは宮への月もよしのつゝ
かなる

源師光

春の山のつきてく月みけて
さつまめ若竹のまつもわかれ
僧都頼基光明山よこもりまね

ときそて月のあはれまさる夜つ
かひある　　橘雅元
うらやまし夏の夜をとくこそいかにわ
くゆるゝき嵐乃月をこそみれん
在へ　　僧都親基
もゝしきやへとりしくも月に雲
くもゐにおもふこゝろとしいかにそらこそ
殷冨門院大輔
ならはねはみつの中をかはるらん
とひまたるゝかはらまちるよ鈴
唐川をながるゝとそなかる

藤右大臣少将
さやくさはたのみしをたつ川
おもふまゝうすきもとをのさねる
源俊頼の朝臣もあつまよりつめ
てもありまかすむ夜のいとさき
さらもて　清輔朝臣しはらさせ給
てもありてせはなれいつまし
なのうけはおもひさきそく
ちりすきこのやまてしはらく雨
桂津

琴の音に松ふく風はかよふらん
ちりにしたへやましらへきかな
為し　兼房
うつりくも船乃ゆくへも松風に
この[illegible]とはきゝつる[illegible]かな
月はあれとまりける夜人ぞ[illegible]と
むかしをときゝて[illegible]かな
内大臣家越後
このはにまつはあさましかや
たまきへの[illegible]

伊勢乃海の[illegible]浦の[illegible]なる
大中臣輔弘
冬かれしすみよしの浦乃見えしかくこそ
まつれさす[illegible]人の松乃村立
[illegible]大夫大蔵[illegible]布留乃[illegible]
まてとまりけるともかよふ[illegible]
めぐるに　大納言経信
白雲と見ゆる[illegible]
山もとは[illegible]
清輔

あまの落川花やちるらん山のまへの尼
なくなりにけれはかの所に侍けるに麓
遂子内親王のいつきにおはしましけるを
くるはつ女房よみてたてまつりける
てしのひてまかりけるを人のいひけれは
のいりたるを人へもとあるくしと
いせはかりにはなくならせたまひてたと
梅の花よそにけりける

神のきさかきの丸とよのすかゝとりし

藤原惟観

なみたをとせきのは人とあめかわ

都芳の院にて女房なとあまたゐて侍けるとき
藤原右大臣少将なりける時に
宮のはしめてつかうまつりける思ひけれは繪の
紙乃はしにかきてたちまちにかへりける

藤原右大臣少方

神のきさのあやまちとおもふてよはなれ
思ひもとなにぬるなりけれはめの心
東宮に侍けるあひたにかつらのまつりつ衣紫
広保後にまつりの頭とも丹もの

のまにまきぬとかくたにとゝまらて
是さわすれなとはまたそのへにたまは
なる事をなけきてはへりけるに事
よめりけるうた

前斎宮内侍

のきしとかのそこはまめかくしたる
あらしのよさきゝも君見ゆるはは
和泉式部保昌にくして丹後に
はへりけるころ都に歌合のありけるに
に小式部内侍歌よみにとられてはへりて
侍りけるを中納言定頼つほねのかたに
まうてきて歌はいかゝせさせ給ふ丹後
へ人はつかはしけんや使はまうてこすや
いかに心もとなくおほすらんなとた
はふれてたちけるを引とゝめて
よめる

小式部内侍

大江山いく野の道のとをけれは
またふみもみすあまのはし立

百首歌の中に暮の心をよめる

修理大夫顕季

うたゝねの夢ならぬこそは別れの
むしろの人をとまるものかや
百とせの秋のまつ旅寝の心をとゝめ
なれ
冬 参議師輔
ところせく中々おもへはいのちの
浅香山[illegible]
山家[illegible]
とふ人も[illegible]逢
藤原清輔朝臣
家の風[illegible]
春[illegible]

しかねても[illegible]
かけ[illegible]
ちよ[illegible]
ゆ[illegible]
平康貞女
[illegible]
[illegible]
なかなかに[illegible]
袖の[illegible]

和泉式部石山にまうてけるに大津にとまりて
よふけてきけは人のけはひあまたして
のゝしりけるをたつねけれはあやしの賤のめの
よねといふものしらくるなりといふをきゝて
よめる

和泉式部

鷺のゐる松原いかにさわくらむ
しらけはうたて里とよむなり

藤原時方（房）の三寅へのともにまかりて
なまくるまにてさをとりけれはかはりに
房に里なりけるに山寺にてをきなとひめ
ひとは花をはなちとかはまちて
くはかのへ海にてさをさしてくちにけ
時方（房）かくれにけりとかたかつらのむかし
おとろきて波の川ほとりとそのよせ
とかへりまつのへたてられしは川江を
まちわひつゝけなむたつらむ

藤原時方（房）

あつま路にとゝろくといふ里ありとはなれて
たるかへるへしや

男なりしをおもふかなたには
いまこそ恨人はさてしく成ばかは
あとやらすそなるをかれり人々
かへるさそ　長宮夫公寅
あかれなるく人のつきいさぬもわ
わすられし人月をへうちわ
大和路通ふ夜あさりのるを
なとゝもにくとうふかと人のかれ
よある　相模
めぐりきせん山田よりくふかましろ乃

さつけ此男をくをはらにあらを
瞭後内侍男まさてへ敬なるを
ほふ人かくまそ絵のなか　若狭信濃
わたしまそく　難く秋をかくりよ
さくもあらぬ袖乃さぐれめくなる
宇治の水車をまはるらむ　備前もりなる
あやきりたのめもかゝりの水車
あもとなかくてかくとまして

例のしめ之事あつまりてしはらくありて
上東門院より拍子をならひたる人々のまゝ
せうかにてまいりたる
堀河右大臣
流の人は流のこの乃多けれとなきをわかてまさは
あらそひ持てりしそのまゝよみてのみなかなし
河右事
過来あつる自の好みもさましつ　上東門院
はしめてまつりもあれはわれたる
後京の尊まうしそれをも申させ

つとめて帰りまて独鈷をさせたれは
からをとゐしつゝゐたまひしより
大納言宗通
草枕たゝよふ旅乃とこなれは
とまりもおきてかへるしやは
おもこ仏のつまてまきそこにそわ
よひたをまきまうつる
をとろまつおもひなりて桃ぬ書
流の人流のしらせ
桜井右

新撰つくはしふの序ある乃五子ふかま
をとこもよういふしはかれる
後冷泉院乃御時よりこの方にわ
ゆきかへりまちたてまつりける
さまうして人々もあらそひ給ふを
男子は女房達のかたへ給へる
各つ稱をよみてたまはりまつりたる
よく濃くなる人々よみあはせたるを
みかきりハ流るゝまゝわたくしかなふ
女好田作

たくひなくせよかしといつはりなきかくし
ありしころと雅のあしかはの如く
甲斐國よりわかれはうれしそこなる人
花もとくりあつかりしうちにけるしるしか
筆をはなれそこれとそなふりなき
とこそなくかれいかなれは
よみ人しらす
名乃こゝろはうつろひゆきかわりにけり八
かはりとなるもの八ましそともあし
百とせの時の中に山家をとふらふ

修理大夫顕季

日くらしの聲はかりする柴の戸ハ
入りあひのさすにまかせてそみる
影しけ人

藤原仲実朝臣

とこなつは我にことしもよとく露を
草のうへにも思ひおかれぬるな

殿上おりて侍ける比人の殿
上すときゝてよめる

源[illegible]朝臣

うらやましやもの雲のかけはし立かへり
ぬるゝ袖はおもひしるらむや

殿上申けるにゆるされさりけれは
よめる

平忠盛朝臣

思ひきや雲井の月をよそに見て
心のやみにまよふへしとは

かたらひ侍りける人のつれなくて
わすれいこと人につかはしける
へかゝはとしろとききて男
のちくわけまかりまかりて
たらすれはいかのうらしらぬ

内大臣家小大進

身のうきもとふれしともまかせつゝ
かれくし花はともまはぬ
男の子のおはりに衣ことゝ人のこゝろ
はりきてすゝめるよもの男まよ
みそきすれは秋はとりなき
さいつるのつきのこのくるまわ
まゝやうまそ文の日さかのたう
つまのあのわかく人流かくてう
きまつわしかのほくよりまうけ

なまくれはかなき　よみ人しらす
わかみに夜たゝの人さいかくなとおしと
ふちの文字八事あまのわかるわ
源利家のあまたる人の大納言よ
生てはかくをむすて両ことやあま
たけましをのころもとよ乃あ
われくまこなきみふとかかそ
つかしみれはなしかくかなふ

源光俊母

日影はいつまかなたちかへるとこそ
おそかれとしるしらへわかれ
絶えてまくらくてはつよはわれ
むかし陸奥守國房ならのよみ哥
まみせんかとやてかとよろにかれし
いつはれをたつのうきそよすむかな
やまはやうふれいうみかな
源俊頼朝臣
ちるきけそりの玉かへるむかしたちしちるあき
とやつのあるはいつまりそわれ

大貳いむ神仙といふ所なきなむく
はるかれい風のともみふのまゝ
なりそまつりはるかさははれせて
まさなる
僧正ひかる
めのる人ゆくいとつまえたかりて丸
をとくきかしもいたもろうちわれ
たちのうゆ人のもへかるひてあわれ
よ子る夜りんてゆかすもとわ
うきなるもめとおいせなまゝかれ
よみ人しらず
よみ人はし

菜くまなく流るるとまて流なく
こはうゑ梅てあやなくかゝるらむ
堀川院乃御時中宮女房達を
亮仲実朝臣の紀伊守にて侍
りける時和歌の浦にさそひて
ともなひ人まちは吹あけのはまのわたり
のままのして流のうたをよめる
　　　　　　前中納言雅定
人なみにあらぬわれをはちいさへの
こころにかけてのうきをいつまでか

保實朝臣みまかりて後の月
乃きさらきつかはしけるついでに
こそとしはせにけれいくたびも
よるくるときにもあるかな
　　　　　　右京大夫母
ことわりやくもゐはいかにしのふらん
うきも身もしれぬ人そかなしき
月の入るをみてよみ侍ける
　　　　　　源師賢朝臣
まつへのこのいつるもありあけのしるし

出ともなき山まつりやまの端（新古）なる月
橘為仲朝臣陸奥守にて侍りける
時延任しぬときゝてつかはしける
藤原澄資
待わびしいかなれやちよをへぬめるを
あふくま川のとゝこほりわたる
ミなとき人の書状まきしもきて
廣乃あなるほとよりかへり給
きこえはなる
藤原家之朝臣
清見山神乃しるしはいはまし

さつのあかるわとゆかてもしいて
夜風乃続まさつとしるの湊也
立つらぬなる雨を滝なる
藤原為頼朝臣
もろ人もちとせのよはひさまれつ
かゝるや旅乃空ほかれ乃ん
題しらす　源道済
身のうさを思ひしらぬにまのとも
とくこそほのかねいへるわれわ
皇后宮美濃

夜ふかくはなとつまそへ乃こゝろ花
つきせぬあさおもひしけれ
上陽人苦最多少亦苦老亦苦
といふ事をよめる
源雅光
むかしよりもあらぬ女はわかれめと
なかれてみをしらぬおもひのかはせ系
青黛畫眉ゝ細長とよめる
源俊頼朝臣
たまかつら
とをまもともくもまゐるま結ひ
いほりくもたえまくるゝかな
無久しき時のしあまさみを達の
まそ殊くへしらぬ雑家のきみを
ならそのはつることとのみやき
おもかへそもろもあやしけれ
やつしたるをまきはわすふかる
いもうつ僧よいかなる人のことにも
ほうよまつしあつまりなる人をとも
ゆかりきはやすそ文乃りつゝける
僧正行尊

いく夜ねさめのはかなさにつれなき
まつらむ人はいまはとおもへは
太宰権帥経信 あつさわするゝ
冬されはさえゆく風のふけぬるに
まくらてはかなきよはの夢をみむ
枕のうへにすさめ人よそに立てよか
わすれかねつ 稲
草の葉のうへにもおく白露の
きえもやらてなくく思ひやる
六条右大臣家のむすめの家にて
あはれとやいかなる人のみえぬらん
とはぬ人をまつよはなりけり
中務卿具平親王母
そのかみの人のことのはのこしつゝ
うき身をそしるへきは思ふ身に
宇治前太政大臣のもとにまかりて
まつそをしとまつ山のみゆるまに
うらみわひてはあるまじき
忠快法師
しらかはの関をこえてくるしみの

むら雲のまよひはやまにかくれしもさし
あるを人はまつるらむ立そとそ桜
すつけられ　因幡内侍
行末も君にちとせの軒の松さつみふかき
きみふかくしられもやとらむ
賀茂の成助よりしかるを猶
ひかりつのそまのかしとみえてそ
ららむ
津守国基
よしやはなのにしきの水まよふ
みこの中をかさねてみえなし

左　賀茂成助
まなみかしちゑよりあきのはなさくわ八
ゆきはこともさとりわれ
皇后宮弘徽殿よりしまいつ後
軒の西のかたはなれて立たる人
まちをはりけるま夜の月のあかくまく
まつのはまさの八須ちなりまくはてれ
いつかそらみゆるをさへもやとらん
ふるのやまかけいまたきこえは右かちを
まつるさくほとわとかとせきまくらむ

皇后宮大夫
石ゝの人のまへ人の庭をも君なる
しるゝ思ひと思ひ入るゝ
大原行逢人乃油へ小袖をつけ
とよみ侍る　天台座主仁覚
ありまもと思ふこゝにはいへなむとし
ちくさすゝ袖乃せくもありける
百首乃歌よとも述懐乃心を詠める
源俊頼朝臣
石中い五はまよれぬへふぬかありや

思ひきやつまとこといふすきせられわ
おとこよつまとて逢ふ乃夜はまちかねて
なかまゝてりおとこ心のかはりてこ
まつしさあゝきは姑すゝ歎乃え
みゝもいつしらぬかな
よみ人しらす
きちたてのむ人またいあらしやは
こちくやしおもひ膝よもなかれ
なく　おりや
おもひやふかきしんのこゝろのかれ

みよしの山は冬のけしきかな

思ふ事侍りけるころ

登蓮法師

後りしもくれ月はかはらぬ里へ

むかしとは思ふよりこそこのまに

鏡にもうつりけりなはこそ心をた

ことならなふ

源師賢朝臣

のかはねくのこゑの家にまへるあとに

おほきの妻をなかめてをつる

前太政大臣の家に侍る女に申ける

ちきりけりとかれはてにしもはや

みれはけふまてはよそにそなと

いはれはとてもなをさやさ

きよとこなれとやのそへあれは

源頼国朝臣

これはの春のいれきそあひはく

はよわこひときくいはこよ

蔵人親隆かよみ侍りけるに

文のかりしらけれ

藤原公教

雲乃上にありしすむかしあくつ乃
ゑせ筆のこくかすまるめすなかれ
猶河原院源俊頼朝臣中
のゝまりしもみへて中納言
歯のゝ名残にけふまつりし
きゝわか

源俊頼朝臣

日落光やあまりてきこえて乃ちおと
てりかなりつらいてまへくきて
兄そそこりしかれいは周防内侍なめ
して兄のえせともありやこと

つまれいはなかりけるこゝろなる

周防内侍

うすの松のみ雲ゆあしよ雲暗きて
きやくらい新しそ

君か住みつゝ世

すみはなるかりくらへ

金葉和歌集巻第十

雑下

[illegible]のくま[illegible]枝は春に[illegible]わ
たまりけるに梅の花さくころ[illegible]
[illegible]ころによみて侍
ける

むかしみしあるしかほにて梅かえの
花たにわれにものかたりせよ　藤原基俊

[illegible]　中納言実行

わかやとの[illegible]花の[illegible]の[illegible]
[illegible]の中を[illegible]といふみゆる

人のあまたまうてきて花みけるに
[illegible]風のおと[illegible]
[illegible]人のこゝろ[illegible]
[illegible]
なりける　平[illegible]経

桜[illegible]風の[illegible]
花の[illegible]
枝[illegible]の首
[illegible]一品宮[illegible]

ちるまては桜の花のちりしくを
あらしにたへぬ人もなきかな

藤原有信朝臣

あやめ草ねをたのみてそくらしつる
あたりにたへぬ花のことをしける
小車のせけるたゝの天のまして
くらふるまてはやとりゝかなく

藤原仲実朝臣

難波かたみやこのあしの葉のしけりは
ゆめもまちのこゝろことにかゝれ

都出てくまなくてまかりし月の
ことしの秋の知信もまされかゝる

康資王母

このまよりは秋いつきぬと思ひしを
ことしもさかりのたのしみはまて

知信

虫の音いはやまかしのまくらにて
秋の夜とともにたへまちちかなて

玉鶴はこしのしま
まかせて鶴のすみかに

源俊頼朝臣

まちもあへぬ瀬乃川いろやかなりしと
何乃うきくさハうきまさりけれ
律師實源のもとよりまゐれる女房の
御くやうせんとてよろづにけしきはま
のわてみえしハこともかふりなかる家
しきをゆるしけれは法師臥して立
かへりまゐるまでのちかきわか女房に
つきめけるとやすき道乃て名
とをしてまかりけるに從濡
うれしくもせて後て今こそいはうる武翁

乃うちにまゐりて人々まゐりつる御
よみ人しらす
三位しろかげこよちらとも見えわたる
ゆへいあやしのうちなきがそこしを
かへちらまるもとをぬくもかくし（お）
まうききれぬ（てはなけ）ともぬ
男まぬちきふも乃ふのわかるるわ　六
風乃ひくらすのなのしくきとも
女房寄もつかねくなてはくら此
なまこにきなくらくる人乃極つまご

てなほまれるふしをゆのよよあめる

藤原知信

あつまてもあふさかりわたする川
きよりのしあいもを何ゆりたとへん
仰ならはいかてか此人乃しもとよわいのこ
ことやたはふれ難はしを給

読人しらす

呉竹乃ねしころしよゝのよ乃男も
とふこと若葉をしをれもしらぬみねまて
菊水影下生ゆるしてかれとせすゝ願

守りこそ侍るなれ此国にわかれはへりなむ
りなむ

右大臣道家

よろつよにすむへき世をそちきりつる
うちの乃こゝろもしらちきてまて
律師長淵よきのわれ母乃みれ
そのわれしてあるなり夜乃夢よ
かえてけるかな
たちらめ秋なのもえこそれはらへかく
思ひ落下りしたえまのなりしき
別伊勢女まとりてなみかはりける

ならくともはなれつゝなとてよおもふ

大蔵卿匡房

ふかきをもとしてなりもみやまとをゆめて
おもはゝとゝそも思てよりかけなむ

従三位藤原賢子まゐらぬ事

おほそくかりつゝはほかくおほしめける
よし人のもとよりいひおこせ侍
りけれは

藤原賢子

いつみはつきをみむとなりぬらむ
とりそてまつらぬかたへのわかれ

かはつなく恨めしくも思ほゆる
むちさかよりなるともなき

権僧正永縁

さるさきもとへの人にいはむ
さむはかへしとらす
人わかれの母の思ふきゝ
またなるかおもひけむ
いそとしてのくせさんとしかるはな
きみてゝかしまにわするゝ

読人しらす

露乃身の消もはてなハ夏草乃
はゝいかにしてあらんとすらん
小式部内侍うせて後上東門院より
としころ給はりけるきぬをなきあとに
もつかはしたりけるに小式部内
侍とかきつけられたるを見て
よめる
和泉式部
もろともに苔乃下には朽ずして
うづもれぬ名をみるそかなしき
こゝろうき人のかたみ(?)にはこの事
みをとりてくかへすかへすもあはれなるかな
平忠盛
とくしは思ひのそはに世中乃
うき雲よそにましはも乃とは
涙の底にしつみつゝも瀬々を
乃もとそへくし丈乃日高乃流るゝ
ゆくとも見えぬかな
藤原資信
こゝろゆかぬ花をたつねて雲井あふれする
なかそし君の嬉しとかもんは

白河院乃女御のくに行て後あちの家
にこしあけて乃若乃華をとり
てよ咲たまひけるをみてよめる
僧正しる(?)

草木まそなかりけるも紫野
折もへ藤のかゝりしまゝにかは

兼房朝臣重服になりてこもりゐたる
所にはまかりたりけるに母乃わと
悔しけにいはれけるをきゝてよめる(?)
よみける(?)

橘元任

かくしつゝ乃大乃ふくまつ乃まつしまかへ
あふまへてし へよとつまさきましやをと

範国朝臣にくして伊豫乃国にまかり
たりけるに正月より三四月まて
いかにも雨のふらさりけれは
苗代もえせてさはきしかは
よろつにいのりけれともかなはて
わひしかりけれは守能因にうたよみて一宮に
まいらせていのらせけれはよめる(?)
あまのかは

能因法師

あまの河菊ゆりよせてふくかせに
あまくたりましゝ神すへらき神
神感あまてる大御神三日三夜を
やまとうたよみてかなへよ
心経流布して人の心を人をまもる
世けんのつねにそなへり

桜町天皇

冬も春も世にすみとくらはなれし
みきりしいあまとよろつきく
法のあまつうるをはた金剛のまなこ

もとよりわかやまとことのはもおもひいつれ
おほせよと人のもとへいひやりたまへ
からうたをよみのせてよまれ給へる

三宮

名のまつはしてかはいさとわかとこそかはら
心ともしとしもとしもやは
月よあまてらす夜勝西上人の御
へ流うつりて

僧正行尊

いとこひしきかなかたりしをたれうらむ
影きえてなかき桜の木のよの月

例ならぬことありける比いくたびも思
ひつゝけて人かれてこそよなふ

源行宗朝臣

為よの世にくしも秋の中よりもふかき深の
そてはかはくまもなかりけり

寂然上人山寺にまかるに親王すゝめ侍
りける

静厳法師

何事もいはてそ人は思ふらん
あはれいかくもかなしき世を

有明の月はやあはれ里の夜
阿弥陀願人のこゝろをまよはし
をしへてことゝなるめ房の群
へにいつくしらまし

道因法師

あさゆふにとゝ嵯峨の夢とて
よしさらは月をまつ秋

依釈迦遺教念弥陀といふ事を

皇后宮肥後

としへぬるやとりの月はさらはいかにと
いかにとりてまし

法華經人悦生をさとす(?)路をきゝて(?)
經をよみ侍りけるに 枕上一燈乃
立のほりぬるこゝろを よみ侍る
[illegible]
[illegible]
[illegible]

普賢十願乃文に願我臨欲命終
時といふ文をよみ侍る
貫樹法師
命をもつきぬる(?)を思ふにたえ(?)わ
はれしともみやまんとゐさせ(?)

衆罪如霜露といふ文を讀侍る(?)
覚蓮法し
浅ミ八重霞も乃はらはれぬめれん(?)
ちゑの日よ法のひかりの照らす(?)

弟子品乃心をよみ侍る(?)
僧正静意
吹かへし風もその山風なすみわたる法(?)
花乃ちりゆく法のかよひに(?)をしかりしや

提婆品乃心をよみ侍る(?)
勝西上人

法乃ためになふ薪にことよせて
やかてうき世をこりそはてぬる

皇后宮権大夫師時

わかそしゆきのしたゝりたえすを
谷川くみし人のうけとは

龍女成仏をよみ侍ける

瞻西上人

わたつ海のそこのもくつとみしものを
いかにしてかは月となるらん

不軽品の心をよみ侍ける

権僧正永縁

あなかしこ法をひろめしほとけまそ
うらみし人もみなほとけなる

涌出品の心をよみ侍ける

たらちめはくろかみなからいかなれは
このまゆしろき人となるらん

薬王品の心をよみ侍ける

懐尋法師

うき身をもわれとやきくは燈に
はてりこしはらをそひけぬりゆるさき

人のもとにまかりて経信卿まかりけるに暮
中務卿親王の御もとにおくりけるに擬之宴
鍾のたえまにそときけるをきけはかなしふ
とふかきよの音にあはれそかつみ袖
のうへに涙はかゝりけるをみて
ていまさにはりけり

勝覚法印

いかにしてこれも法のをしへをまちえん
思ひもうけぬ人もありけり

維摩経信心の八のたとへをよみ侍りける

あすはけふのことしとやいかなる
ときよくる

信尊法師

仏は流いと思ひたねをまきしてみの
くるはふねとなるをたとくゝらん

常住心月輪をよみ侍る

澄成法師

よとこもてりんのちりしたむ月を
かとこゝろにてるかなあきの秋

醍醐の桜会によむ

珍海法師

よみ侍

くるしなすくなかしるやさとまし清のか
なるしはむなと思りなすしはを
極楽をおもふとしかは事を
源俊頼朝臣
よもの池乃はにたゝすみくれとも
あみへ乃わさにはふもしらす
地獄絵にはゝるきみえたるに人忘
つるをつきとなふもあそそある
和泉式部
浅ましやつるきのえたのたはむまて
こはなにの身乃なれるなるらん
人乃もとより法文の儀に絶て
ませうんとしけれは志とこゝ乃もとに
うきこともあらはしきことまて
法にあまれ春乃あはにあわなる
秋にはちるさくらはいきのゝる
まに
因位童如
華乃葉てりかそいはさてもと部
志その山は乃もかくやなかくき
かくて法のみてりあはらいるとそなる

たのもしくくらきにまよふ佛
人はみなるなねしるしたのみな
唐風乃律は天王寺乃西門に
法師乃みちまよのつゆてし海よ
こきいたすかりてものうけつ西を
よまふ

源俊頼朝臣

たのめ絶佛といふかなる絵をはまよや
くるしきうきちとこきいたすまよひん

連称

たうまてのよしあし石乃山乃ことは絵る

まよふ人乃あとはいのりをすゝき

永成法師

おもはまし人も絵すらいりまきとこもりを

権律師慶範

心ちらつてむまちかつらりやすらん

桃さく乃花をかりとこ

権守俊頼

もとをみてもと乃あさいにさくる

公資朝臣

梅はる乃世にめいちつまやしらなん

賀茂乃尾人のまそとのつくなと花
しゐるときゝてよめる
神主成助
志めのうちは身をもくたかすさくら花をしむこゝろを神にまかせて
行重
いかなはのこる花はゆくもあらなん
よそにて田乃井まて花なかる男め
梅のうちをとやへるまゝめ
僧正源覚
よそ乃田りしもかはりてなをちるさくら花
宇治入道太政大臣
いかのみふくらまよひをちとちや
日の限ふるをとめそ
観暹法師
日乃ひかりふかしこまよく何はれ
平為成
あかねさすはなもおちくらゝむ
田か井まて乃立たる花を見そ
永源法師
ちりはてゝこゝろちくはのまゝめる

永縁法師

ふしはの水はいつとみえ人ぞ住ぬと
かくしやらむとみえこそすれ

河内

かくしきの乃いなきもぞそともみえ枝らる

肥後

つらくのみしもやまさへつゆ
なくの乃志らぬしなかとやる

為助

いまとまつなくふしかみ志なかな

玉忠

松たえ山里乃月のもとにおもふ
六波の海の里のふるさとりて
乃あまわかれしいの川のそ〳〵ほ川
とまるそ海をとめをそくゆるを
ますそてかなたをかかな

顕綱朝臣

かも川をなつのはなみそもかなかな

信綱

うきはる海をみほすしともかなかな

あはれともみえぬかなかに
よ人わびぬ
なほなほあはれなるをあはれといはん
道信妹
うきみにはとまらぬものを思ひつゝおちつもる
源頼光の但馬守にて侍しに
つらくともたのみしものを
みをしるとみえてなきぬるかな
神楽大輔
ちりやまるかきをはなちまつる

和泉式部
是はへ志もの国へはかへらんとて
源頼光の但馬守にておはしけるに
館の前の河をよそにまつかはと云河のあ
ふりそめ舟のくるまはけうそとをと
みなくふかくによのふかれしそれと
ゆきそかはそをうはへちかへと
きくそくるらんとをまつひらける
源頼光朝臣
ちかひける人をもたのまぬはいつくそふかひれ

是をきゝ影またきゝえのしこみ

相模母

あさくまる起うしゆの音乃手枕ハ

清人王まゝ

はるかくきハらのをふけしもの大のわれ

安芸國大和春子

かゝり乃まよしくしそハ大のわれをき

王ものも草とふくそ結思ほ

つまうのすちと花をそもそしとせけつ

こゝろこゝみ

夫也とおもき次

ひをてりいよう花まるは草の

やくるくのもいけのちすくうの花すれと

よをまちを乃きまとしくすまつる

こおもえりもつ秋けつをかくて

よあり

夜嵐きいきしもきてとまめけすね

かつちころおさへをまいのつ雪まのしやを

みそ名り乃梅乃そ雅乃をそれ

なをふ物よあつさをかくて

律師慶範

せきもあへぬ花のをちこちみちのしら
まへなれはしはしのほとそふかゝらむ
あらはるゝ風のなみまや思ふ者
瀧の音みちはなほそよそにきこゆ
ならむ

よみ人しらす

よしのやまあらしのはなのしらくもの
かすみのそらもかりのゆくらむ
移りゆくまゝにしはしのふるさと
のゆくすゑ

永源法師

おほつかなみやこと人のしらぬまに
済ひと石和
こゝろもしらぬいまはみなのほとりに
かつはるゝ雑のかひそとなりぬらむ
よしなし

成光

おくれぬるおもやへをとにはいつ

観暹法師

あれをしはしらぬまにも人をとふ書わ
さすらふなみまに流れのゆくも

ふくてゆく所あやしたえこと
ふとおもひたなつまくとある
源俊頼朝臣
あまのはらみそらめつるしほの
なみのそし
ゆふしくはなも
たえもなしめつるかな

考案 全